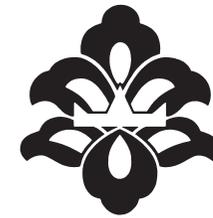
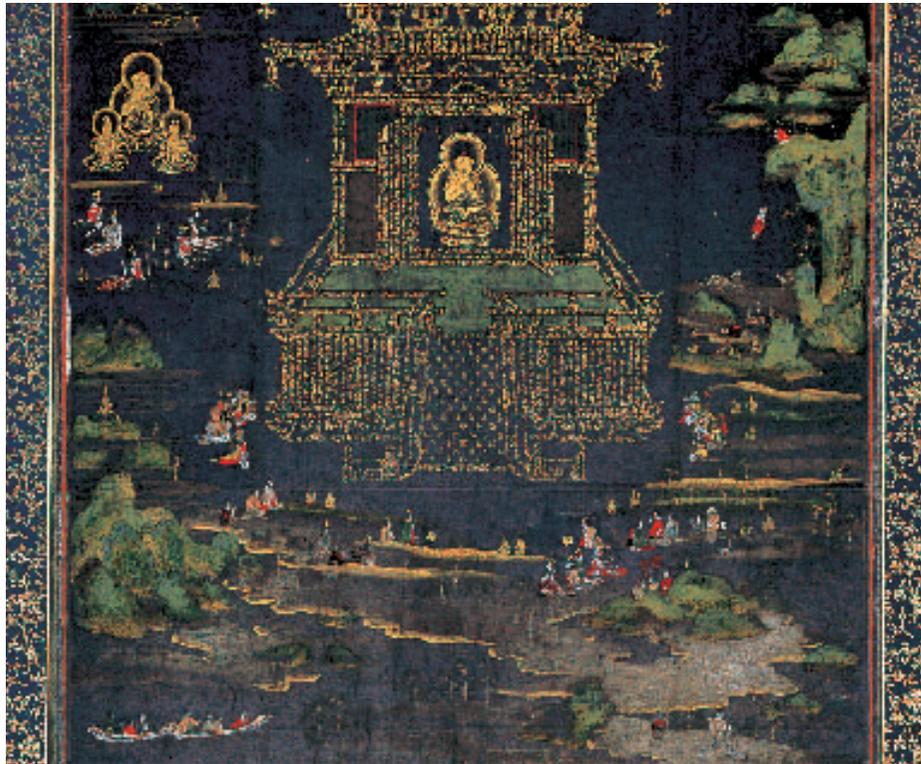


関山

かんざん

第8号



寺報 中尊寺

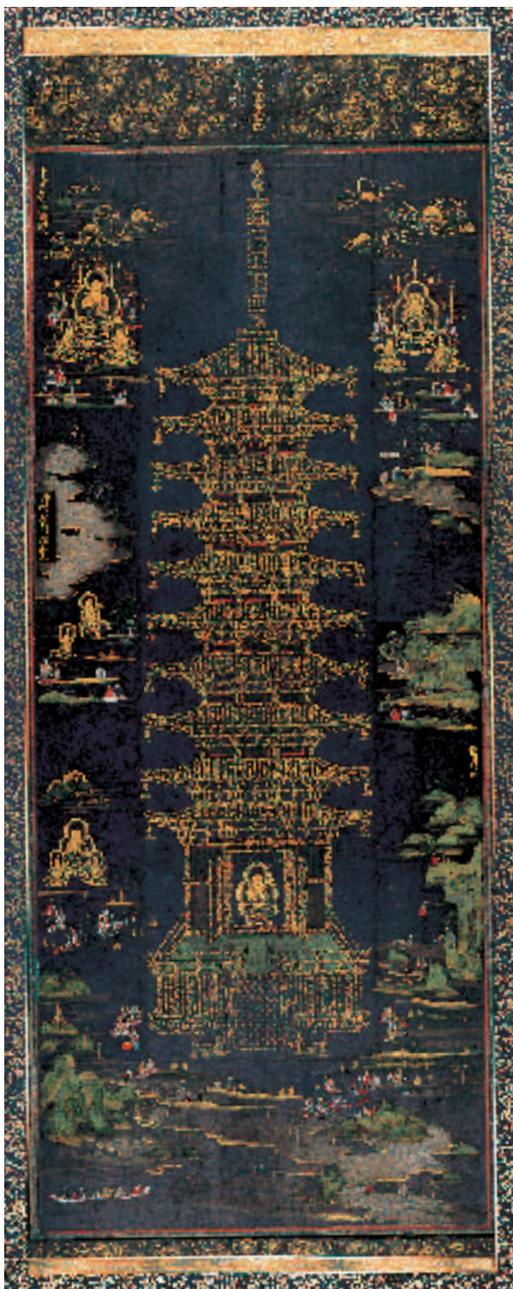
〈発行 中尊寺〉

目次

寺報ぐらびあ	
東北の未来への祈り	貫首 千田 孝信 10
〈櫻井よしこ氏・講演概要〉	
東北から世界へ	貫首 千田 孝信 14
法話「中尊」の誇り	貫首 千田 孝信 20
鼎談「未来を語る―平泉から世界へ―」	
五年の盛岡	志賀かう子 29
再見・大池	及川 司 51
句碑のこと 蓮のこと	佐々木邦世 56
研究／出版	
新指定の国宝「金字宝塔曼荼羅」	67
福聚教会中尊寺支部	69
東日本奉詠舞大会「唱詠の部」で初優勝	71
近年還蔵された金字経・金銀字経について	
北嶺 澄照	72
陸奥教区宗務所報	75
執務日誌抄	79
御奉納者御芳名	96
不動尊篤信御奉納者御芳名	96
赤堂稲荷鳥居建立寄進御芳名	97

〈表紙・扉〉

紺紙著色金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図(第10幀)



紺紙著色金光明最勝王經金字宝塔曼荼羅図(第10幀) 69ページ参照



第25回 中尊寺新能「猩々乱」(佐々木多門師 平成13年8月14日)



福聚教会中尊寺支部、平成13年度東日本奉詠舞大会唱詠の部で優勝(平成13年10月5日)

還蔵となった金銀字経 4 卷



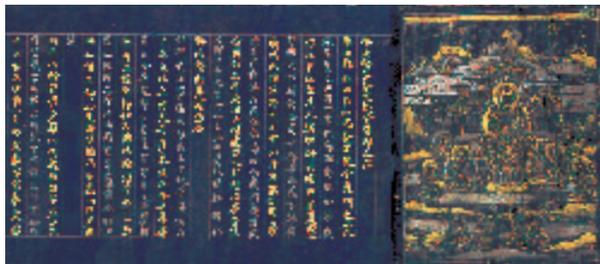
大般若波羅蜜多經卷第七十 (平成13年6月27日)



大般若波羅蜜多經卷第一百五十四 (平成13年6月27日)



大般若波羅蜜多經卷第三百七十八 (平成13年6月27日)



轉法輪經憂波提舍一卷 (平成13年7月7日)



法華說相図 (平成13年1月23日、入江正巳画伯より奉納)



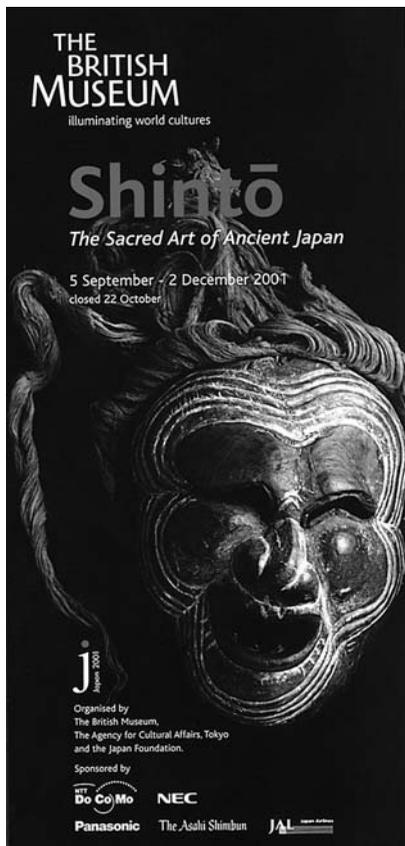
燈籠 (平成13年7月17日、鈴木正人氏より奉納)



華籠 (平成13年7月17日、鈴木正人氏より奉納)



金色院修復落慶 5月10日



◀「老女面」海外へ 7月18日
 ロンドン大英博物館で9月5日から12月2日まで開催された「古代日本の聖なる美術」展に中尊寺老女面出陣。



自主作成ポスター 10月4日
 久々に金色堂内陣のポスターを作成、各方面より好評を得ている。



平泉町民号 11月7日
秀衡公寄進の虚空蔵菩薩が
奉安されている岐阜県石徹
白の地を訪れた。(石徹白大
師講の皆さんと)



瀬戸内寂聴師来山 12月6日
当山真珠院澄順師に天台寺副住職就任の要請あり。後日、一山承諾し推挙す。

大池跡発掘調査現地説明会

12月25日

10年計画で実施されている「特別史跡中尊寺境内」遺構確認調査。6年目となる平成13年度は大池跡東側を発掘した。

今回の調査で、大池が清衡公の時代に実在していたことを示す成果を得たもようである。今後の大池跡全体調査に注目したい。



出土した12世紀のハスの花床



清衡公の時代(12世紀前葉)のかわらけが出土



東山町「若水送り」平成14年元旦早朝
地域の人々に支えられて「若水送り」は10回
目を迎え、元旦恒例の行事として定着した。

◀稚児による若水汲みの儀



▶本坊玄関前での若水進上
の儀



◀若水を汲んだ稚児から
名水「磐井清水」が手
渡された

平成13年度

中尊寺新執行局

執事長 佐々木 邦世

総務執事 佐々木 仁秀

御金色院執事 菅野 澄順

管財執事 北嶺 澄照

法務執事 清水 広元

参拝執事 佐々木 慎宥

参務 佐々木 秀圓

参務 菅原 光中

(讚衡藏館長)

平成十三年四月一日 任命

天台宗東北大本山 中尊寺

貫首 千田 孝信

総務部次長

千葉 快俊

総務部次長

菅野 澄円

管財部次長

佐々木 秀厚

法務部次長

佐々木 長生

。輪番

金色堂

菅野 康純

讚衡藏

三浦 春興

不動堂

破野 澄元

。仏教文化研究所

本堂

菅野 宏紹

破野 澄元
菅野 成寛
北嶺 澄照

東北の未来への祈り

——清衡公の祈願

貫首 千田孝信

金色堂は中尊寺の象徴である。弥陀三尊の在します極楽浄土の莊嚴を、美術工芸の粋を尽くし皆金色を凝らして形象した光堂は、清衡公自らが往生行儀の典型を示し、ご遺体を委ねた葬堂でもある。金色堂は文字通り、金色に匂いたつ中尊寺最高の聖域である。

清衡公はもちろん、自分ひとりの極楽往生を祈念したのではなかった。寺に伝承する第一級史料「中尊寺建立供養願文」の有名な一節に、清衡公が東北の民庶に寄せた深い哀切の思いが籠められている。

一音の覃ふところ千界を限らず。苦を抜き楽を与えること、普くみな平等なり。官軍夷虜の死ぬこと、古来幾多にして、毛羽鱗介の屠を受くるもの、過現かぎりなし。精魂はみな他方の界に去り、朽骨はなお此土の塵となる。鐘声の地を動かすごとに、冤霊をして淨利に導かしめん。

多年の戦塵に消えた罪なき魂を、敵味方の恩讐を超え、さらに鳥獸魚介をも含めて、悉くやすらぎの浄土に導きたいと切願した清衡公の鎮魂の祈りは、東北に初めて開かれた高い次元の精神世界の証として、不滅の光を放っている。

しかし、金色堂は元来、清衡公が、自らの魂の来世を祈念した、いわば私的な御堂なのである。そ

して清衡公は、つつましくも金色堂を「願文」の記載から外はずされたのであった。

では、清衡公が中尊寺を建立した、いわば公的な中心道場は何か？

「願文」の冒頭に掲げた「鎮護国家大伽藍」である。東北の大地に新しい未来を開こうとする未来志向の壮大な祈願である。

中央の花洛みねから、地方に与える恩恵として国土安穩の祈りの花びらを散らすのは、むしろたやすい。清衡公は、草深い「みちのく」の辺地から、心を開いて五畿七道・日本国中の万姓兆民の福祉の祈りを発信するのである。この方向性の違い、ここに清衡公の五分の魂がある。「みちのく」が中央なのである。

中尊寺の寺号「中尊」の意味について、前貫首の多田厚隆師は「中尊とは、ここを法界（世界）の中心道場とする意味である。あまねく人類の依りどころである理想に基づく」と、意義づけられた。天台の教をふまえ、しかも清衡公のお心に根ざした定義として、私は深く肝に銘じている。

清衡公が、「中尊」の誇りを抱いて建立した「鎮護国家大伽藍」の中心道場とは、中尊寺の最初院「多宝塔」であった。いうまでもなく、法華経「見宝塔品」に基づくもので、「みちのく」の大地から涌わき出た初めての宝塔である。まことに残念にも、十四世紀の野火で焼失し、今は心の眼まなこでしか仰ぎ見ることができない。しかし、見えないものを見る心眼しんがんでも、失ってはならない。

清衡公の魂を捉えたのは、万人に成仏の可能性を保証する法華経であった。十一世紀から十二世紀にかけて、折しも末世の不安に脅おびえる衆生の来世しゅじょうを導く阿弥陀如来への祈りも切実ではあったが、清衡公が、その壮大な祈願を傾けたのは、法華経の教主、「三界火宅」の現世げんじを導く釈迦如来しやくかにょらいであった、

と私は思う。

法華経「從地涌出品」でも多宝塔が涌出する。爾の時、釈迦如来は、他方の国土から出現した千萬億の菩薩たちではなく、この娑婆の大地から涌き出てくる無数の菩薩たちこそ、「泥の中から咲く華」こそ、「私のまことの弟子であり、私の真の子である」と讃えて、絶対の信を託されるのである。

「みちのく」の大地の中から涌き出てくる人材、現世の苦難に耐えて東北の未来を切り拓き、この地に「人類の理想」を実現しようとする菩薩たちの出現こそ、清衡公は切実に祈願したのである。

宮沢賢治は、さすがである。金色堂を「手触れ得ぬ舍利の宝塔」と捉えている。賢治だけではない。清衡公の祈りに応えるかのように、東北の大地からはその後、数多くの人材が輩出した。近くは大槻玄沢・高野長英・原敬・新渡戸稲造・後藤新平等々、いずれも、「みちのく」の大地の中から涌き出た「地涌の菩薩」たちである。清衡公の祈願はみごとに実り、かつ今もなお、東北の新しい未来を、あかあかと照らしつつけている。

比叡山を開いて「鎮護国家」を祈願された伝教大師・最澄は、「法華経大意」に誌している。

もし眼を挙げて東方無尽無際の世界を見れば、天地風雨、山河大海、乃至一塵も法界にあらざることなく、南西北方、四維上下またまた是のごとし。……およそ十方三世の諸法、六趣四生的一切衆生、みな妙法にあらざるはなく、みな仏身にあらざるはなし。

これが最澄から円仁へ、円仁から清衡公へ、脈々と伝承された天台の法華一乗の観慧である。そしてこれが、清衡公の発願の信のありどころ、賢治の魂をも貫いた法華経の信と行願なのである。

平泉の世界文化遺産早期登録を実現しよう

未来を語る 『平泉から世界へ』

11月16日、一関文化センター大ホールを会場として開催された。



中尊寺貫首千田大僧正の法話
(20ページに収録)



櫻井氏の講演 (14ページに収録)



中津・黒沼・藤里の三氏による鼎談 (司会は中尊寺佐々木執事長)

(29ページに収録)

東北から世界へ

東北といえますか、雪国といえますか、私は新潟県の高校を出ましたけれども、こちらの方へ参りますと、ふるさとへ帰ってきたようなそんな感じがいたします。

日本という国がちょっと変わってきたなど、近年特にそのように思われることが多いですね。社会も、国家も、人間も、文化も、変わるのとは当たり前ですけれども、どういうふうに変わるのか、次の世代が本当によりよい方向に変わってほしい、成長してほしいと思わうわけですけれども、心もとないものがございます。大きな事件が起きたとき、大きな歴史の潮目の変化に直面したとき、私達の国は一体何をしたいのかわからないようなところに来ています。

アメリカが同時多発のテロリズムによって攻撃

され、六千人くらいの方々の方が亡くなりました。その中には二十四人か五人の日本人が含まれております。これにどう対処したらいいのか。日本人が、もしくは日本という国が、自分達の価値観というものに対して自信を持っているならば、それほど難しいことはないと思うんですが、戦後五十七年が過ぎまして、私達は日本の文化、伝統、価値というものを、どこかに半分忘れてきているように思います。日本人としての価値観であるとか、やるべきこと、守るべきことが、よくわからなくなつたために、いざというときに間髪を入れず判断をすることが、とても苦手となってしまいました。

テロ事件が起きたのは九月十一日、私はベトナムでそのニュースを聞きまして、各国のニュースが全部同時中継で入るわけですけれども、さすがだと思つたのは、フランスでした。事件発生後二十分ぐらいで、シラクさんが演説をしました。

「これは私達の文明、自由主義であるとか、デモクラシーとか、個人の尊厳、それから人権というものに対する重大な挑戦である。フランス政府は

アメリカと共にテロリズムに対して断固戦う」と、非常に格調高い演説をしました。それから間もなくイギリスのブレアさんも、ロシアのプーチン大統領も、中国の江沢民さんも、そしてベトナムも、「このテロリズムとは断固戦う、アメリカを支持する」という声明を出しました。

わが国の外務大臣と総理大臣は、いかがでございましたでしょうか。官房長官がおっしゃったことは、基本的に邦人の安否に関する情報を収集しますということでした。小泉さんが一番先におっしゃったことは、「怖いねえ、何が起るかわからないから」でした。いわゆるぶら下がりと言われるもので、カジュアルなコメントが出てくるのは仕方がありませんが、これが全部海外に流れるわけですね。ブレアさんも、三十分ぐらいにわたって素晴らしい演説をしました。そういった国々の指導者のメッセージと比べますと、総理も外相も官房長官のメッセージもいただけませんね。

日本政府が正式な方針を強く打ち出したのは、事件発生後八日目のことになりました。その後

対応の発表が遅れた分だけ一所懸命に追いつこうとするかのようになり、行動はとも素早かったです。でもなぜ我が国は一週間以上、対策の表明が遅れたんでしょうか。それは自分がどういうふうに対応すべきか、自信がなかったんですね。日本国はこんな大きな事件に直面して、なかなか判断できなかった。

それから、その後の日本の論壇をずうっと見ていますと、ビンラディンも悪いけれども、アメリカも悪いという意見が出てきました。アメリカのアラブ政策が間違っているからだ。そして、坂本龍一さんという音楽家は「報復しないことが真の勇氣である」と朝日新聞に書かれておりました。皆さんいかがお考えでしょうか。私が尊敬する塩野七生さんという歴史家がいらっしゃいます。国家論とか、戦略論とか、非常に優れた作家です。この方が、一番最近の月刊「文藝春秋」に『日本人へ！ービンラディンにどう勝つかー』というタイトルで、論文を書いておられました。

塩野さんは、ビンラディンという男はなかなか

の男であると言っていました。大国アメリカを相手に、あれだけの喧嘩を仕掛けたわけですから、普通の人ではないでしょう。ビンラディンが言っているさまさまな主張もなかなかのものです。しかしそれはレトリックというものです。身もふたもないようなことを、あたかも身もふたもあるように見せかけることができる巧みな話術、巧みな言論をレトリックというのです。

塩野さんは、ビンラディンの主張を大きく四つに分類いたしました。アメリカを攻撃することはアラアの神の思し召しにかなうことなんだという理由の第一は、パレスチナには八十年の不幸がある、この不幸に終止符を打つためである、と。これはイギリスがパレスチナ人とユダヤ人の両方に「パレスチナの地に国家をつくっていいですよ」といった二重外交をやってしまったわけです。二番目は湾岸戦争がありました。国連総会の決議案に基づいて多国籍軍がつくられ、その後も経済制裁が続けられており、イラクの国民が苦しい思いをしている。これに終止符を打たなければならな

い。

三つ目は聖地のあるアラビア半島に、アメリカやイギリスの軍隊が駐留しているのが許せない。四つ目はイスラム諸国の腐敗したリーダー達を許せないと言っているんですね。テロリズムを正当化するような理由を与えてはならない。そのためには四つのことを全部変えていけばいいのではないかとというのが、彼女の論旨でございます。

今のイスラム諸国の指導者が国民の支持を失って、国内が不安定になって失脚するとしても、それは彼らの責任で、パレスチナ人の言うことを良く聞いて、私達があの文明、あの地域での歴史を理解することが必要であり、戦いはアメリカがやりたがっているんだから、アメリカにやらせればいい。日本は復興の方に力を移すべきだ。パレスチナ人は六百万人しかいないのであるから、一億二千五百万人の我が国民が、この経済力と知恵と技術と心をそこにすぎ込んで、パレスチナ国家の建設に力を貸すことが、日本の存在感を高めることであると書いてございます。

でも、これを読んでもとても落ちつかないですね。このような見方というのは、きわめて戦後の日本的なもの見方ではないだろうか。塩野さんがおっしゃっていることは、とても妥当なことのようには思えるのですけども、よくよく考えてみると、これであのビンラディンに勝つことができるのだろうか。

テロリズムとは交渉しない、おそらく日本を除く全世界の価値観なんだろうと思うんですね。もしビンラディンが言っているような四つの理由に一々応じていたとします。例えばイラクに対する経済制裁を解いたとします。フセインはおそらく核兵器をどんどんつくるだろう。生物兵器もつくるだろう。非常に厳しい査察をするという条件をつけなければなりません。核兵器を持たない、生物兵器をつくらないということ担保する仕組みをつくらなければなりませんね。ビンラディンの提案した、要求したことに従ってそれを聞くということは、ある意味ではビンラディンが言っていることは正しかったんだというイメージを、国際

社会に送ることになりますね。正しかったから、それに対して反応してくれたんだ、正しいことを言っているからこうなったという論理に、どうしてもなっていないと思います。

塩野さんは国際社会のことを、よく知っておられる。しかしその塩野さんにしても、ビンラディンの要求を全部聞いてやって、ビンラディンに理由を与えないのはいいのではないかと思うんですね。日本の「呪縛」という言葉を言ったら大げさになりますでしょうか。戦後日本が陥ってきたこの精神の呪縛から逃れることができなのかと思うと、私は本当に残念だと思いました。日本を除くすべての国々がテロリストとは交渉しないと言ってるんです。

さて、もう一つ日本の論壇で言われていることは、アメリカは果てしない戦争に入ってしまった。そしてベトナム戦争と同じように敗北を喫するだろうという見方です。第二のベトナムに陥るだろう。しかし、私達は過去の事例を眺めると共に、過去と今が、どこが同じで、どこが違うのかという点

をよく見なければならぬと思います。かつての私達には、そのような見方ができておりました。

目前の戦いにどう勝っていったらいいか。この戦いが終わった後にはどういふふうにしてこの国を守っていき国民を守っていけるか、ということを常に考えました。

なぜタリバンは思ったより早い段階で撤退したのであろうか。十年間もソビエトと戦って勝った国、長い間大英帝国と戦って勝った国が、僅か何週間かで撤退した。しかし、今のアフガニスタン、タリバン政権とかつてのアフガニスタン政権が立っている立場が違うことに注意を向けてほしいのです。ソビエトと戦ったアフガニスタン政府に対してはアメリカが援助をしていました。ベトナムの後ろにはソビエトと中国がついていました。しかし、タリバン政権の後ろにつく大国は、どこもないのです。国家と個人の時代だという人がいます。テロリズムというのは個人なのであって、もう国家と国家の戦争の時代ではないといえます。けれども、依然としてこの地球上は、国家の時代

が続いていると私は感じます。国家というものをどうやって考えたらいいいのか、私達は日本をどのようにとらえたらいいのかということが、そこからまた見えてくるのではないかと思うわけです。

塩野さんがおっしゃる、戦いというところに参加しないで、復興というところに重点を置きましょうというのも、非常によくわかります。多分日本はそういった方面で非常にいい仕事をする能力を持っていると思います。しかし、かと言ってその前の段階を、塩野さんがおっしゃるように飛び越していいとは思わないですね。なぜならば日本も国家であるからです。日本人も犠牲になっているからであります。ビンラディンの挑戦に対して、後ろ向きの弱い対応をするということは、国家としての日本の基盤が疑われるということになるからですね。

戦後の日本の社会とか国家というものが、基盤が非常に弱くなっている、その一つの理由は私達がいろんな意味で日本を日本たらしめてきた価値観を忘れてしまっているからだろうと思うのです。

私達の国の価値観では、お年寄りを大事にし、親を大事にし、学校へ行く子供達は大いに学び、働くことをよしとし、自身が謙虚で、自分の能力を磨くことによって、家族がより幸せになり、その延長線上に社会がよりよくなる。国家がよりよくなるという価値観を持っていた筈です。その辺がどうも、戦後は経済成長だけやっていけばいい、経済成長が最重要のこと。そのほかのことはとても軽視されてきた。自由というものを最大限に享受するように、権利というものを最大限に行き使するようになりました。

日本国憲法第三章『国民の権利及び義務』は一番大きい章なんですけれども、その中に権利と自由という言葉が、とてもたくさん使われていて、責任と義務という言葉は、比較的少ない。言葉がどれくらいの頻度で使われているかということから、日本国憲法の精神は、権利と自由が、責任と義務の大体四倍から五倍ぐらい強調されているということが言えるでしょう。

自分自身を律するという心を、私はこの東北に来て、首都圏にいたときよりもより強く感じます。東北の人たちのほうが、とても謙虚です。自分というものをよく見詰めている。二十一世紀の日本が立ち直るとしたら、その精神を東北から日本全国へと広げていくことではないかと思えます。

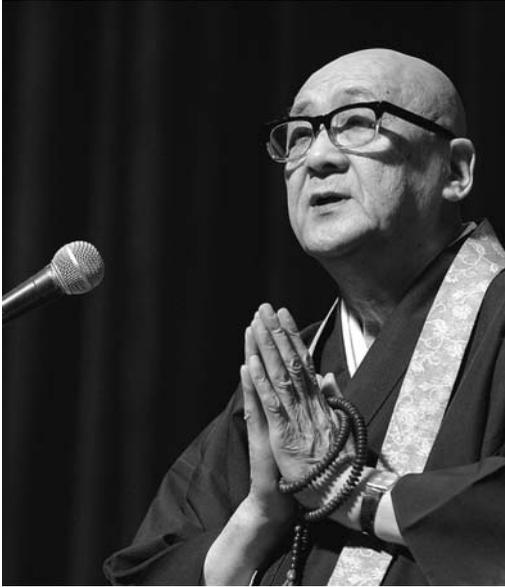
二十一世紀の日本が、経済だけではなく、素晴らしい文化を持っている国であり、日本の文化の中には素晴らしい精神が宿っている。歴史を振り返ってみても、なんと素晴らしい精神性が、そこに凝縮されていることか、こういったことを二十一世紀、国際社会にこの東北から言ってほしいと思います。この一関、平泉、日本の東北の人々の心を、価値観をもっともっと広げいていただきたいと思えます。(拍手)

〔この稿は、本誌編集子が、できるだけ講師の語り口調を容れて要約し、成文した〕

法話

「中尊」の誇り

中尊寺貫首 千田孝信



話というのは、前座のほうが楽なんです(笑)。
櫻井よしこさんのような美人の話手の直後で、し

かも現代の国際政治の生々しい、ヴィヴィッドなテーマをとらえて、鋭く日本の在り方を問われるという、いいお話の直後で、「法話」をするということは、非常に難しい役柄でございます。しかし、そのとき義経少しも騒がず(笑)、お話を進めさせていただきます。

私は歴史学者でも、作家でもございません。一介の拜む者、祈る者でございます。幸いにも中尊寺貫首という特権をいただきまして、いつでも自分の時間の許すときに金色堂のドアをあけ、あの須弥壇の前に座って、清衡公を初め四代公のご遺体の直前で、瞑想を凝らす時間に恵まれております。ですからいつでも私は、清衡公のお心の在りどころはどこにあるかということ、この肌で感じ取らなければいけないと、努めている者でございます。したがって私の話はどうしても清衡公の生きていらっしゃる時代、十一世紀の末から十二世紀の初めまで、時間の軸を巻き戻さなければならぬわけでございます。

十二世紀初頭、千百一年というのはちょうど九

百年前ですね。その頃清衡公は、大きな決断を迫られていた。大きな選択の決断を迫られていたと思うのです。

ただいまのお話にもありましたが、目先の問題だけでなく、遠い将来を見詰めて右を選ぶべきか、左を選ぶべきかの大きな決断に迫られていた。朝廷に対し、攻めてくる官軍に対し、あくまでも徹底的に「蝦夷原理主義」を貫いて抵抗するか、それとも長年のわだかまりを捨てて、朝廷と官軍を受け入れ、戦いをやめて、平和を選択するか、この大きな決断だったのですね。清衡公は熟慮の末に平和を選択いたしました。このときの清衡公の遠い東北の将来を見詰めての決断のシンボルが、平泉仏教文化だったのです。

もし清衡公があくまでも徹底的に抗戦するため、平泉に頑強な軍事的施設、お城であるとか、砦であるとか、あるいは柵であるとかを構築していたとすれば、平泉の今日は草ぼうぼうとして生い茂る廃墟にすぎなかったと思います、とても世界遺産どころの話じゃなかった。

ただいまもお話がございましたように、国の内外に悲しい犯罪事件が次々と起こっておりますね。近くはニューヨークにおける同時多発テロ、その被害者、その遺族の身にとってみれば、どんなにそれが辛く悲しく苦しい出来事であるか、思いはかり知ることができないくらい、それは大きなものです。しかしその悲しみ、苦しみ、心の中に沸き起こってくる憎しみというもの、恨み・ルサンチマンというんでしょうか、そういうものは、犯罪被害者の心から容易に消えるものではありません。しかしそういう怨念、憎しみを消していくということは、人間にとって最も困難であるけれども、気高い、高貴なはたらきで、相当の宗教的修練を経なければ達成できない、心の営みなのです。清衡公は前九年合戦で父親を七歳のときに失いました。攻めてきた源氏、源頼義によって、父親藤原経清公は盛岡厨川で捕らえられ、鋸のような鈍刀で首を斬られました。その悲しみ、苦しみ、怨念は、清衡公の胸から、容易に消し去ることはできなかつたに違いありません。しかし清衡公は、

あえてそういう憎しみ、恨み、ルサンチマンを自分の心の中から消していくという、気高い営みにチャレンジなさったのです。これを持ち越えることを、ご自分の課題、修行となさった。それがご自分だけでない、同じ前九年合戦、後三年合戦で、尊い血を流した、陸奥の庶民の無実の庶民達的那种ういう悲しみに思いを馳せました。

さらに、攻めてきた官軍、守った夷虜、敵、味方、その差別なく、これを安らぎの浄土に導きたいと、一生懸命にお祈りしたんですね。さらに人間達じゃなく、毛羽鱗介、つまり生きとし生けるもの、傷ついた動物・魚介にいたるまですべてを鎮魂したい、霊を慰めて安らぎの浄土に導きたいという念願を起こされまして、中尊寺を建立なさられたのです。中尊寺建立の大きな清衡公の動機だったのですね。これは初めてこの東北に開かれたきわめて気高い、次元の高い精神世界の始まりでした。

清衡公が中尊寺の丘の上に建立なさったお堂は約四十、その中には二階大堂というように、後に

頼朝公が真似して鎌倉に造ったような立派な殿堂が含まれておりました。しかし誠に残念にも、十四世紀にその大半は野火によって、焼け落ちてしまいました。その火災の中で、平泉の私達の先輩が、命を懸けて守り抜いてくれたお堂が二つ、その一つが金色堂であり、傍らの経蔵だったのでね。この二つのお堂だけに現存している国宝、これが点数にして約三千点です。二つのお堂だけで三千点、これを考えると、私夜眠れなくなりまして、なるべく考えないようにしてゐるんですがね。(笑) もしこの四十余りの堂塔が全部残っていたとしたならば、たいへんなことです。中尊寺は宝物館をあつと二つぐらい建て増ししなければならなと思います。

しかしここでご注意申し上げたい。火災から守られて残った金色堂というのは、先ほど申し上げたように、清衡公が自分の心の中の憎しみの念を消し去ろうとして、宗教的な修練を詰まれたお堂、成仏のためのお堂、ある意味においては来世の往生、極楽を祈願する、そういう意味ではきわめて

個人的な、プライベートな、私的なお堂なんです。つまりそれは公にすべきではない、個人的な問題です。むしろ隠しておくべき、そういうお堂だったのです、これが残ったんです。したがって中尊寺に伝わって残っております第一級の歴史資料、これを中尊寺建立供養願文と言っていますが、中尊寺建立供養願文は、金色堂について全然ひと言も記載されておりません、触れてはいないので。当然です、人間としての慎みです、自分のことですから。自分の魂の浄化、自分の魂の成仏を祈った個人的なお堂ですから、公にすべきお堂ではなかった筈。

じゃあ清衡公が目指したパブリックな、公共的なお堂とは何か、先ほどの建立供養願文の冒頭に掲げているお堂は何か。金色堂ではありません。「鎮護国家大伽藍」といいますね。国家を守るための大御寺おおみでらをつくるんだと、これが清衡公の本来の祈りだったんです。つまりこの平泉から、東北の未来の安寧と福祉を祈願する大御寺、大伽藍をつくりたいと、しかも東北だけじゃないんです。

五畿七道と申しまして、この平泉の一角から、日本全国の安寧と福祉を祈願する大御寺を、この陸奥に建てよう、それが中尊寺を建立する清衡公の本来の公共的な、パブリックな、壮大な祈りだったのです。こういうふうな鎮護国家の理念、新しい東北の未来、遠い日本の福祉と安寧を祈願する、そういう理念を裏づけたのが、法話になります、法華経なんです。妙法蓮華経、私ども中尊寺は比叡山を祖山とする天台宗に属しますが、天台宗は元は天台法華宗と名乗ったぐらいです。朝は元氣よく法華経を誦誦します。夕方は西に落ちていく入日を見つめながら、来世を思い、今生きている感謝の念仏を唱える。「朝は法華経、夕方は念仏」、これが十二世紀末、十三世紀にかけて、法華経は日蓮宗に、さらに念仏は法然上人から親鸞上人の浄土門へと分化してまいります。十二世紀は、清衡公の時代は分化する前、「朝は法華経、夕方は念仏」これが天台宗の非常に幅の広いところだったので。

しかし十一世紀から十二世紀にかけて、ご承知

だと思いますが、末法到来と申しまして、この世は終わりだという末法思想が入りまして、その時代趨勢の影響もあって、極楽往生ということが強く意識された。さらに金色堂だけが残ったために、とかく中尊寺という金色堂、そして往生極楽が強調されてきたように思います。

しかし鎮護国家大伽藍の筆頭に清衡公はどういうお堂を掲げたか、これは金色堂じゃないのです。金色堂は個人的なものですから、ひと言も触れない。「三間四面の檜皮葺きの堂一字」その御本尊は来世を祈る阿弥陀如来でなくて、現実の娑婆世界を導く釈迦三尊なのです。法華経の理念に基づいているのです。

法華経というお経は、あらゆる人間の平等を高らかに宣言したお経です。人間の平等といっても、欲望の平等じゃありませんよ。人間の尊厳性の平等を説いてるんです。人間の低い次元の平等ではありません。人間の目指す高い次元の平等を説く、これが法華経なんです。清衡公という方は、最後まで自分が蝦夷出身であることを忘れなかった方

ですが、この清衡公の胸を打ったのは、高らかに人間の平等を宣言する法華経であったと、私は認識しております。

それだけじゃないんです、中尊寺では毎朝法華経を読み継いでおりますが、読んでいて元気になってくるんです。法華経は人間がこの苦しい娑婆、この矛盾に満ちた現実を、いかに苦しくても、困難であっても、雨にも負けず、風にも負けず、生き抜いていかなくちやダメだよという、そういう希望と勇氣に溢れてるのです。この娑婆世界、現実はいつでも苦しいです。しかし希望を失ってはいけない、くじけてはいけないと、そういう希望と勇氣を引き出すような力に溢れてるのです。清衡公はこの力に打たれたなど、私は金色堂の須弥壇の前で肌で感ずるのです。

例えば法華経の一節に、こういう説、場面があります。娑婆世界の大地の底から、たくさんの無数の菩薩、無数の優れた人材が湧き出てきます。大地の底から湧き出てくる、そういう菩薩、これを地涌菩薩と言うんですがね、大地から湧き出る。

娑婆世界の大地の底から湧き出てくる地涌菩薩達に向かつてお釈迦さんがおっしゃいます。「娑婆世界の大地の底から湧き出てきたお前達、大地の泥の中から湧き出てきたお前達こそ、私の本当の弟子である。外から、天界から舞い降りた菩薩達は、どうぞ本国にお帰りください、娑婆のことは娑婆にお任せください。私を助けるのは、この娑婆の大地の底から湧き出た菩薩達です、お前達です、よろしく頼みますよ」、これが清衡公の胸を打った。「陸奥みちのくのことは陸奥みちのくにお任せください。

どうぞよそから来たお客さんはお帰りになって結構です、陸奥の大地の底から、陸奥の泥の中から湧き出した無数の人材が、菩薩達がおそらく湧き出るであります。その菩薩達が必ず東北の未来を切り開くに違いありません」、これが清衡公の本来の大きな祈りだったんですね。

こういう清衡公の非常に広大な深い祈り、祈願、これを敏感に察知した、そういう菩薩が、これを象徴的に表わしている菩薩、これが宮沢賢治だと私は思っています。陸奥の山を渡る風を愛した宮

沢賢治、陸奥の大地を、流れる北上川を愛した宮沢賢治。そして陸奥の大地を、困難にもめげず耕し続ける農民をこよなく愛し続けた農芸科学者。あるいは陸奥の天空の果てに宇宙の広がりまで感じ取ることができた詩人。あるいは「でくの坊」と呼ばれてもいい、しかし自分の心と体を下座行に徹して、東に西に、あるいは南に北に、自分の心身を捧げたいと、「そういうものに私はなりた」と、心に刻みつけるように書いた賢治。これはまさに地涌の菩薩だった。賢治まで下がらなくても、清衡公ご自身が陸奥の大地から湧き出た菩薩であることを自覚したと、私は思うのです。

さらに清衡公に続いて毛越寺に世界一の大浄土庭園を切り開かれた基衡公。さらに人格の器量において頼朝に完全に匹敵する器量を持った三代秀衡公。あるいは主君義経のために馬前に矢面に立って、散っていった、そしてその名を『平家物語』にも留めた佐藤継信、忠信兄弟。あるいはまた頼朝公の前に呼び出されて、陸奥武士の意地を最後まで貫き通した出羽の由利八郎。詳しくは申し上げ

げる暇ございません。あるいはまた近くは、水沢出身で封建時代のあの暗い闇の中で、オランダをはじめ海外に開かれた眼を持っていた高野長英。

あるいは一関出身、『蘭学階梯』を著し、『解体新書』編纂に携わった、つまりやはり封建時代の暗闇の中から、日本の遠い将来、海外を見つめることのできた大槻玄沢。あるいは最初の平民宰相であった原敬。あるいは水沢出身で台湾総督府に入って、李登輝前大統領ですら今でも尊敬していると言われている後藤新平。あるいは南部藩出身で『武士道』を書いて、日本の武士の在り方を世界中に啓蒙して、さらにアメリカと日本の架け橋とならんとした新渡戸稲造。あるいは現代では水沢出身で打たれても打たれても屈しない小沢一郎さんですか（笑）、あるいは盛岡出身の作家、最近には『火怨』（アテルイ）を書きましたね、あの高橋克彦さん。あるいは後ほど壇上においてになる一関出身の作家中津文彦さん。そして夜更けるまで郷土の将来を心配して、こんなにくさんお集まりの皆さん方。まさに陸奥の大地の底から湧き出た

菩薩、優れた人材です。清衡公の念願、祈りは成就したのです。

西行法師も平泉に二回来てくださっています。しかしやはり西行法師は都の方でした。陸奥の悲しみがどれほどわかっているのか。陸奥の悲しみは、陸奥の大地に骨を埋めるのか。

芭蕉も来てくれました。高館で「笠打敷きて時のうつるまで涙を落し侍りぬ」と、義経の最期を悼んでくださいました。しかし芭蕉は、結局その骨をどこに埋めたか、近江です、大津です。木曾義仲のお墓の背中合わせに骨を埋めました。

清衡公は陸奥の大地から生まれました、そして陸奥の未来を切り開いて、そしてそのご遺体を中心とする金色堂に預けたのです。宮沢賢治しかり、尊寺の金色堂に預けたのです。宮沢賢治しかり、宮沢賢治も陸奥の花巻で生まれ、北上川で産湯をつかり、岩手山を渡る風に吹かれて育ち、そして陸奥の農民を愛し、そしてその骨を花巻に埋めました。みんなそうです、陸奥の大地から湧き出た本当の菩薩は、故里の大地に骨を埋めるのです。

私も父親は水沢出身ですから、陸奥の人々の気持ちは痛いほどよくわかります。

中尊寺の中尊という意味には、いろいろございます。しかし私の前の貫首、多田厚隆先生は、優れた天台学者でいらっしやいました。その多田厚隆貫首は、中尊寺の「中尊」という意味は、世界の中心、法界というと言葉が難しいんですが世界という意味です。世界、あるいは宇宙です。世界、宇宙の中心にある尊い寺という意味を持っていて。中尊寺の「中尊」という意味は、世界の中心、宇宙の中心である尊い寺という意味を持っていて。あまねく人類の抛り所となる理想、これを実現しようとする寺なんだ、こういう解釈をなさいました。私はこの解釈において、「中尊」という意味が、未来への繋がりを持つ意味づけを深めたこと認識しております。

陸奥は中央の都から見たらば、政治的には地方です。しかも道の奥の地方、ローカルです。しかも都の豊かさから見れば、貧しい田舎かもしれない。経済的にも、あるいはまた社会的にも辺地です。当時の京都から見たら、本当に「道の奥」だった。あるいは地理的にも、文化的にも、都が

ら見れば格段の落差のある辺境であり、辺地であるに違いございません。しかし、宗教の次元に立って見ると、誰でも一人一人、人間は世界の中心である尊い存在なんです。田舎に住んでいても、地方に住んでいても、人間は一人一人が世界の中心にある尊い存在であるという、そういう自覚、これを「中尊」と名づけるんです。そしてこれが仏教の目指している悟りの境地なんです。自分が今立っているところが、最大級の第一級の悟りの場なんです、ほかにはありません。自分が今座っているところが、世界の中心、人類の理想を実現する最高の道場なんです。こういう自覚、こういう悟りの境涯に、清衡公がお立ちになったんだらうと、私は肌身で感じ取っているわけです。「どうせ俺なんて」とか、「どうせ私なんか」などという弱音は、清衡公は一口も、ひと言もおっしゃらなかったです。たとえ都から蝦夷と言われようと、道の奥と言われようと、世界の中心にある尊い存在、尊い自分なんだと、こういう中尊の自覚を持って、東北の未来を切り開かれました。これ

が平泉に平泉仏教文化を創造した原動力、清衡公の平泉文化創造の源泉であったと、私は確信しています。

清衡公は陸奥にあってでも最高級を目指しました。第一級のレベルを目指しました。この高い志、それだけじゃない、それに伴う第一級の努力、雨にも負けず、風にも負けず、第一級の志に伴う、第一級の努力を傾けられました。平泉金色堂に残っている平安美術工芸のグレードの高さ、レベルの高さが、完全にこれを証明しております。

都の、あるいは世界の最高級にある文化、世界の最高級のレベルにある文化に接したとき、決してくじけてはいけません。感動しなければいけません。こういう素晴らしいものがあったんだ、まじり感動する、そしてそれに対する羨みとか、嫉みとか、妬みとか、いわんや先ほどの話のテロリストのように、憎しみ等を抱いてはいけません。どこまでも主体的に、どこまでも自分みずからが、この土地で最高級の文化をつくるんだという中尊の自覚、これを持たなければいけません。そして

それに伴う第一級の努力に耐え得る人間に自分を律し、自分を鍛え上げていかなければならない。

やはりその自覚と、そういう努力が、幾世紀にもわたって人類世界が営々として築き上げてきた尊い人類世界の文化なのです。平泉文化はそういう人類の世界文化創造の一つの見事な典型だったと思うのです、だから世界遺産に値するのだと私は思います。そしてまたそういうスタンス、そういう心の構え方、これが二十一世紀の東北を切り開く原動力になるのだと、私は確信している次第でございます。

夜が更けてまいりました。御清聴を感謝申し上げます、私のお話を終わりたいします、ありがとうございます（拍手）。

「未来を語る

—平泉から世界へ—

作家

中津文彦

岩手日報社編集委員

黒沼芳朗

毛越寺執事長

藤里明久

司会 中尊寺執事長

佐々木邦世

佐々木 時間はまだ予定より五分ほど早いようですが、勿体ないですから少しでも多く皆さんにお話していただきたい、そろそろ始めさせていただきます。

鼎談というのは、三人の方がそれぞれにお話くださるということで、私が入ると四人で四談（余談）になりますので（笑）、控えるようにしております。

まず自己紹介を兼ねて、ただいまのお二人の先生、櫻井よしこ先生のお話と千田孝信貫首のお話

を聞いた感想なり、反論なりコメントを二、三分でいただくことにします。それでは先輩であります中津文彦先生よりどうぞお願いします。

中津 どうも中津でございます、しばらくでござ



いました（拍手）。私は一閃の出身でして、ときどきお邪魔するんですけれども、やっぱりふるさとに帰ってきたなという、いつもそういう心の高ぶりを感じます。特にきょうは私の大好きなジャーナリストの一人である櫻井さんのお話を、我が意を得たりというか、楽しく拝聴しました。太平洋戦争に敗れたときから日本はどうもその指針を失って、羅針盤のない日本丸になってしまったような、それはやっぱり戦争で自信をなくした後遺症だろうなあと、ずうっといろんな意味でそう思っておったんですが、櫻井さんのお話では、まさに同じことを、呪縛という言葉で表現されて、本当にそのとおりだと思いました。

それと千田貫首さんのお話も感銘深く拝聴しま

した。平泉の仏教文化の素晴らしさというのは、なんとなくわかるんですけども、今日は池涌菩薩じゆうざつという法華経のお話を伺い、腑に落ちるものがありました。

佐々木 それでは岩手日報社編集委員の黒沼さん、どうぞ。



黒沼 よろしくお願いたします(拍手)。中津さんは岩手日報の先輩で、私が入社した時は、事件記者でした。中津さんは早くてうまい記事を書き、私たち後輩を指導してくれました。今もって先輩、後輩です。最初に中津さんがお話ししたことで、すべてが尽きます。しかし私は今の櫻井さんと千田さんのお話を、別な角度で伺いました。

それは「日本人の在り方」ということを櫻井さんが話され、千田さんは日本人の範とすべき典型を、清衡公のお話に託されたという気がします。櫻井さんは、かつての日本人の決断力やモノの見方について述べ、当時の武将を引き合いに出し、

千田さんはそれを具体的にお話されました。

まさにかつての方々は、しっかりとした決断が出来、判断する力があつたこと、また何より素晴らしいのは、その当時に国のことを考えていたということでした。千田さんのお話は、清衡公ということを中心に平泉文化を話されたのですが、櫻井さんのお話と非常に共通しており、なるほどと思いつつあります。

それは千田さんが話されたことです。千田さんは「人間は世界の中心にある尊い存在である」と話されましたが、このお言葉は人それぞれが一生涯続けなければなりません。こうしたことを考えますと、私たちは果たして尊い存在である先賢をどのようにとらえてきたのでしょうか。

それからお二人のお話に共通していたのは、多くの先人たちが命をかけて守ってきたものがあるんだということです。具体的には遺産であるのですが、それは遺産に託された先輩の精神でもあるわけです。お二人のお話の共通性に非常に驚きな

がら、また感動しながら伺った次第です。

佐々木 ありがとうございます。最後になりました。毛越寺執事長藤里明久さん、よろしく。

藤里 よろしくお願います(拍手)。テロという



犯罪については、どのように対処したらよいか、私はよくわからないわけですが、文化財の保護という視点で言うなら、最大の

敵は戦争だと思えます。文化財というのは、その民族なり、その地域の人達にとって、最も大事な精神的な支柱になるものだと思うわけです。そこで戦争という行為、それは様々な形をとると思えますけれども、例えばアフガンで、バミヤンの遺跡が破壊されて、我々日本人は仏教遺跡を破壊されたということで、ものすごく憤りを感じながら、あるいはそれを防ごうと努力した方もたくさんいたと思うんですが、結果的にはあの貴重なバミヤンの遺跡は破壊されてしまいました。しかし今またアフガンでは、たいへんな爆撃をやっている。アフガンというのは、その昔は言うなら

ばシルクロードの要衝ですから、決して砂漠と山とそれだけの無味乾燥な地域ではなくて、そこには貴重な文化財も多々あるんじゃないかなと思います。犯罪に対処する方法には、もっといろんな方法があるんじゃないのかなと。何もかも打ち壊してしまうということは、せっかくそこで育った民族なり何なりを、ある意味で抹殺することであるし、我々は別の対応を、どこかでやっぱり考えていかなければいけない。

ほかにパレスチナの問題とか、いろいろな問題が世界中にあるし、我々はそれに深い理解を持つてるわけじゃないのですけれども、陸奥みちのくというのは、前九年の合戦とか、後三年の合戦とか辛い戦いを強いられて、みずから望まないでそういう戦いを強いられてきた地域です。そういう長い戦乱を超えて、先ほど貫首様がおっしゃったように、敵、味方を超えて、それを慰める、あるいは生きとし生きるもの全てを慰めるという、その人間的な対応をしなければ、結局は文化財なり文化も守れないだろうということで、まあ櫻井さんに対す

る考え方ということよりは、文化財というのほまうちよっと重みのあるものだ、決してたやすくなくしてはいけない。一度破壊されたら、それはもう戻らない、戻らないというのは、我々の過去が消えるのと同じだと、一人の人間の過去が消えていくと、そういうことを私は感じるんですね。ですから何もかも一つの怒りの中で抹殺していいものかどうか、そういうことをお二人のお話を聞きながら考えていたところでございます。



佐々木 ありがとうございます。司会の中尊寺

の佐々木邦世でございます（拍手）。念のため申し上げておきますが、この司会をやってくれと言われまして、私の方から出した条件がございます。お話す方々とは一切打ち合わせはしない、打ち合わせすると、なんか談合みたいになって、ああ言ったらこう言ってくれるだろうと、甘え寄っ掛かりになってしまいます。一切しないと。先ほど名刺交換させていただきました。

きょうのタイトルが、「未来を語る―平泉から世界へ―」ですね。今までは平泉という言葉がいろんな表題に、「平泉の歴史」とか「平泉の八百年の流れ」とか、「文学に表れた平泉」とか、必ず過去形、歴史が付いておりましたですね。『未来』と付いたのは恐らく初めてだと思います。ですから、今日の鼎談の最後は話未来を見据えた中で詰めてお話しなければいけないということなんですが、どこか真っ白いところに未来があるわけじゃございません。

「歴史に目を閉ざす者は、現代に対して盲目である」、ドイツのワイツゼッカー、ドイツの良心とも言われますね、ワイツゼッカーさんが、何度か日本でご講演されたその中のお話かと思えます。その現代が、先ほど櫻井さんのお話のように、二・三年前までは混沌の時代とか、病める現代と言った。ところが、病めるとかそんなもんじゃなく、もう激流の中に流された、そんな感じさせる昨今でございます。しかし、振り向けば未来、あくまでも振り返って、そして現代を見、櫻井さ

ん風に言うと、そこに違いを見なさいということのようですが、その中で未来をも目に入れたいと思うわけです。

先ほど中尊寺の貫首さんが引用されていた話の中に、「中尊寺建立供養願文」のことがございました。あの中で要を取れば、戦争はいかなる理由があってもダメなんです、やっちゃいけないんです。国家、国民の自覚とかなんとかわれましてもダメなんですよ。正しい戦争というのはないのだということ、12世紀に平泉から発信し、国家中枢の文章博士敦光に起草成文させてるんですね。それが、12を逆にして21世紀になって、まだ同じことをやってるわけでございます。人間大したことないと言えば大したことないんですね。その人間が菩薩になるのかどうか。

それではこれから本腰入れて、まず先輩の方からどうぞ、十五分ぐらいお話いただきたい。あと我々は、遠慮して十分ぐらいしておきます(笑)。打ち合わせございませんので、どうぞご自由に(笑)。

中津 そのとき義経少しも騒がずというわけにはいかんですね。打ち合わせはないけれども、質問項目があるのかなと思ったら、そういうことじゃないんですね。

佐々木 まあどうぞ。

中津 そうですか(笑)、まあ私の父親も、実は高校の教師でしたけど、僧籍にありましてね。禅門だったもんですから、面倒くさいいろんなことを、例えばたくわんは音をさせないで噛めとかね、そういう躰けをされてきましたけれど、きょうのよう難行はちょっとあんまりなかったですね(笑)。ただ、確かに今まで平泉というと、歴史という面からだけとらえていたきらいがありました。それで現代の遺産をどう残すか、世界遺産にリストアップされた、さあ、本登録へという、そんなふうな節目をとらえて、平泉の持つておった力を未来へどう伸ばして、生かしていくかということを考えるべき時期であろうとは思いますが。実は今日、一冊の本持ってきました。これは最後に締めるときにご紹介しようかなと思っただんですが、『奥州

藤原氏五代』という本なんです。これをお書きになったのは、大矢邦宣さんという方で、ご承知の方もたくさんいらっしゃると思いますが、岩手県立博物館の主席専門学芸員やってらっしゃる方で、私、実はお会いしたことないんですよ。ただ今年の春にこの本が生まれて、これは我が意を得たりと思ひましてね。藤原氏というのは、やっぱり五代というとらえ方をしなきゃならん、さっきの貫首さんのお話にもありましたが、清衡の父親、藤原経清という人物が一番の根っこにあって、その上に清衡の努力が実ったわけです。経清の悲惨な最期というものが、平泉を一代で築き上げるまでの大きなエネルギーになっていったという意味で、藤原氏五代というとらえ方をして、その中で栄枯盛衰を説いていらっしゃるわけです。「本書は、平泉が世界遺産に登録されることをバックアップしたいがために書いたのだ」ということをはっきりと眼目として掲げてらっしゃるわけです。大矢さんは、清衡のたった平和戦略というふうなもの、三つにまとめてらっしゃいます。

一つは、陸奥^{みちのけ}を一つにまとめる強い権力を確立しなければならぬ。都の干渉、それを招く内部分裂を防ぐためにもそれは必要なことだ。

二つ目には、都との平和的関係を維持して、特産物の供給を続け、富を陸奥へ導入すること。つまり交易・経済戦略ということです。

三つ目は、京の文化を積極的に摂取して、陸奥の地位向上をはかること。併せて都からの偏見、差別をなくすことである。そのためにはどうすべきか、独自の文化をつくらなければならぬ、真似だけではダメなんだということをつけ加えていらっしゃるわけですが、私はやっぱり一番目の陸奥を一つにまとめる強い権力を確保するという点が重要だったと思います。現代に置きかえると、日本という国、国家というものは、どうあるべきかということをしつかりと認識をして、それを統治浸透させる強い力、パワー、これが必要なんじゃないかということですよ。

いわゆる八百年前も、現代も、さらにこれから先の未来も根幹は同じだと思ふんですね。例えば

模倣したのではなく、独自のカラーを打ち出す、そういった文化戦略というものが必要であろうし、それから中央に対してものを言うこと。後でちょっと予算の話もしたいと思うんですけども、いわゆる文化予算というものに、どう取り込んでいくかというときの一つの戦略といえますか、中央官庁を説得する、あるいは官庁だけじゃなくて、その文化レベルにあるいろんな人達の方の共感を得るといふ戦略にも必要なことじゃないかなという感じがしておるわけです。

その具体的なことも二つ、三つ考えているんですが、またそれは後でお話したいと思います。

佐々木 お好きなことを、藤里さん、さっき文化財のことを言われました。そのとおりだと思えますが、何か毛越寺のことに限って、無形文化財「延年」でもいいし、浄土庭園には池の中に八百年ずうと立ったままの立石もあるし、日本の庭園は本当に世界性があると思うんですね。そのあたり、PRになってかまいませんから、どうぞやってください。

藤里 毛越寺は庭園が知られているわけですけども、平泉文化を黄金文化というのは、私どもの寺に金色堂がないもんですから、あんまり使いたくないなと、実は思っておりまして……。それは半分冗談ですけども、かつての平泉を振りかえって見ると、なぜあんなにたくさんのお寺を、こんな狭い地域につくらなければいけなかったのか不思議ですが、何か精神的な想像力といえますか、バックボーンがあって、平泉というのは生まれたのではないかな、という感じを持っています。庭園というのは、要するに樹木があって生きてるわけですね。これまでは例えば文化財というと、非常に固定的な変わらぬもの、あるいは何か大きな危害を加えない限りは変わらないという固定的な考え方で見てたわけです。

日本の文化財保護法の中では、名勝・史跡・記念物という言い方をしますが、どこかやはり固定的なイメージがあったわけですね。これは解釈の違いかもしれませんが、今回の世界遺産の問題の中で、文化的景観という言い回しで表現されるも

のが出てきたわけですね。ご存じのように世界遺産というのは、文化遺産と自然遺産、それに両方合わさった複合遺産というのがあるのですが、加えて文化的な景観を取り上げていくというのが、新しい視点じゃないのかなと思っっているわけです。

古都奈良の文化財というところで、春日大社の御神体である春日山原始林、ここは勿論伐採しないで保存された貴重な原始林ですけども、それを世界の文化遺産の一つとして含めるという考え方ができきました。庭園も、実は建物の付属的なものではあるとは思いますが、それ自体も文化的な価値を持っている。そういう景観の価値を認めようということに近年なってきたというのなと感じて、非常に驚いたわけです。

庭園というのは、歴史の中でどんどん変わっていきます。壊される面もありますが、変わってきます。でもなおかつその大枠は変わらないで、作庭当初の様式と考え方みたいなものを、作庭の思想といえますか、そういうものを残していきたい。これが文化的景観の一番大事なところかなと

思っているわけです。平安時代の日本の庭造りの貴重な文献であります『作庭記』というのがあります。それは宇治の平等院を建立しました藤原頼通の子の橘俊綱という方が編纂をしたものです。それには石を立てるには、どういう考え方で立てたらいいかとか、例えば遣水のこと、池のこと、さまざまな作庭技術、あるいは技法ですね。そのほかに思想的なことも書かれているわけです。

毛越寺庭園には、その『作庭記』に記述されている思想なりを背景に、当時の技法がたくさん残っている。その上でその歴史的な意味を持つ景観を保っているところが、これは手前味噌になりませんが、私どもの庭園の一番良さではないかなと思っっているわけです。そこで文化的景観ということ、どのように私達はとらえていったらいいのかなど、今回の世界遺産の中でも、毛越寺に限らず隣の観自在王院とか、あるいは無量光院、それから中尊寺の大池とか、さまざまな園池が、この平泉には残っているわけで、これは京都にも残っていないものです。それらは我々の小さい頃は単なる

池であったり、単なる石ころであったりしたわけですが、それが本当はどれほどの価値を持っているかということは、私自身も気づいていなかったわけです。徐々にその歴史的背景を知ることによって、価値がわかってくると、この庭園というのはもうちょっと崇高な考え方のものにつくられたのではないかなということも感じてきているわけです。思想的な背景を持っている庭園であるということも、もう一つは庭園というのは生きていくものだという考え方がありますので、文化的景観というのは、人間と自然とが織りなしているものであると思います。この点が今回の「平泉の文化遺産」、その中で新しいものの考え方かなと思っておりますので、一つの庭園の枠の中だけじゃなくて、周囲、環境ということも非常に大事なわけです。

日本の名園といわれてる名園は、今非常な危機にあります。典型的なのは、例えば東京の浜離宮のようなところですね、周りにビルが林立している。そうするとその小さい空間である程度のこと

を感じられるけれども、その周辺は全然違ったものに変わってしまっていると。そうなるとその庭をつくった思想なり、あるいは借景なんていうことも、全然意味をなさないことになってしまう。その庭の魅力が、半減してしまうということもあるわけですね。そんなことを考えていくと自然環境とか周辺の環境ということも、この世界遺産の中では大事なことだと思っております。

佐々木 ありがとうございます。先ほど櫻井さんのお話を聴きながら、「産経新聞」のコラム、産経抄を読んてるような気になりました。また、貫首のお話を拝聴しながら、「朝日新聞」の文化欄の話を読ませていただいたような気がしましたが、今回の主催の一翼を担ってるのは「岩手日報」でございます。日報さんの目から見まして、この地域における大きな問題を抱えてる平泉、どう見えるのか、そのあたりを暫くお話ください。

黒沼 いやー、きょうは来るんじゃないかなという感じです(笑)。今、私は「岩手日報」の夕刊一面で、『いわて21世紀への遺産』というシリ-

ズを担当しております。私と写真部が連携し県内すべてを取材しております。去年は『古代・中世を歩く』がテーマで、今年は『近世・近代をたどる』と題して、旧一関藩からスタートし、旧仙台藩を中心に岩手県内全域に移り、「岩手らしさの定着」を探っております。この連載は平成九年から始まり、平成十四年までの六年間の大河連載です。すでに千回を越えており、終了時には千三百回ぐらいになります。平成十四年のテーマは『近代化遺構を歩く』で、岩手県の近代化に果した学校や銀行、鉄道、橋、住宅などを取り上げます。

今、邦世さんがおっしゃったことに対して直接の答えにならないかもしれませんが、お話し上げたいことがあります。平泉周辺を取材して感じたことがあります。例えば室根村、本吉町、衣川村を取材しますと、平泉を支えた周辺文化の広さを感じます。ヤマの高いところが中尊寺、平泉であり、そこだけが光り輝いて、あとのところは歴史の狭間に埋まっている感じがしてなりません。そこで、平泉周辺と文化について広域市町村連携

でぜひ取り上げてほしいのです。

その一つは、まずこの地域の平泉関連のマップをつくってもらいたいことです。市町村とか県がタイアップして、東磐井郡、西が連携しながら、どこに何があるのか、ということを紹介してほしいんです。『いわて21世紀への遺産』の『古代・中世を歩く』の中では十数回にわたってしか取り上げられませんでした。平泉周辺には多くの遺産があります。中尊寺が光り輝いている背景、それを支援してきたかつての村々、つまり現在の市町村を取り上げながら、平泉文化とは一体なにかを、後方からものをみていくアプローチの仕方は非常に素晴らしいんじゃないかと思えます。

ところで平泉には藤原清衡公のミイラがあります。泰衡公までの四代です。清衡公の前には経清がおります。

皆さんはそのことを何で知ったのでしょうか。私は中学の時、平泉に関する長い文章を読みました。松尾芭蕉の『奥の細道』です。これを授業で学び、やがて修学旅行に参りました。それから新

聞社に入ってからはその関連の本を読みました。しかし現場で取材して思うことがあります。皆さんは、どなたかに、関東や関西、外国の方々に、「平泉について、何か手ごろなガイドブックはありますか」と尋ねられて、すぐに頭に浮かぶ本があまりでしょうか。じつは難しいことです。

これは平泉に限ったことではありません。啄木も賢治もしかりなんです。そこでそういうような、内容が濃くてしかも平易なガイドブックを、これから世界文化遺産の本指定を受けるまでの間に作ることは出来ないだろうかと思えます。

具体的に申し上げますと、月に一回平泉の中尊寺などで、本日ご出席の方々を講師に一般を対象にした「平泉文化について」の講演会を開き、その講演を本にまとめられないだろうか、ということなんです。しかも小学生が読んでわかるような内容のものです。例えば奥州藤原氏は、佐々木邦世さんにお話して書いてもらう。金のことは一関市在住の産金遺跡研究者の名村栄治さんに、遺跡は平泉町教育委員会の本澤慎輔さんなどに

す。また蝦夷について、仏教王土などを今の時点で話され、それを一冊の本にまとめて欲しいのです。

関東などから講師を呼ばずともここには素晴らしい研究者がいっぱいおられます。本の力を、と重ねて申し上げたいのです。

佐々木 ありがとうございます。今、黒沼さんのお話を伺って思い出したことが二つあります。一つは扉の「戸」というのが、地名の中によく出てくるんですね。衣川の古戸だとか、大船渡の渡だっけともともそうなんです。瀬戸内海の戸もそう「狭戸」なんです。室戸岬の戸だとか、長野県の戸隠だとかですね。あの「戸」というのは、意味深い文字で、今言われた「平泉が平泉だけであるんじゃない」、戸というのは、外社会、外世界と区切るといふこと、そして逆に、そこを通って風や光が入ってくるころ、という意味があるんですね。

そしてもう一点、地元の人にやってもらう。人はそれぞれ見る視点が違いまして、例えば私なん

か大好きなんですが司馬遼太郎、あの人は関西、上方から見るとですね。それでこう言っている。

平泉は、財力いっぱいあったかもしれない、軍事力あったかもしれない、でも天下を狙う意志、気概がなかった。そんなものはダメなんだという価値判断を書いてらっしゃるんですね。誰か尤もだと思う人いるんでしょうか。私は違うと思うんです。そんな、国家を天下を狙ったから一流で、狙わないものはあくまでも一地方史に甘んじているべきだという、そんな価値観、評価は一面的ですね。そのようなこともありまして、本当にその土地に生きて、その空気吸ってる人達に書いてもらうという今の提言は、ぜひ生かしたいと思えます。ものを書く人、どうぞ。

中津 さっきの藤里さんのお話、非常に我が意を得たりと思えましたね。本を読むも勿論大事なことで、記録を残すも大事なんですが、「平泉ってどういうとこだったの」という問いにどんな答えがあるか、ですね。「素晴らしいとこ」「どんな素晴らしいとこだったの」「金色堂があった」「ああ、

そう、あとは？」あとはあんまりないんですよ。本当にそういう意味では、よほど知識を持って、想像力を働かせないとわからない。まあ今日は観光論議をする場ではないんですけども、観光的な意味でも、遺跡しかないというのは非常にネックになっている。

今世界遺産という大きなきっかけ、これは非常に弾みになると思うんですよ。追い風といいますかね、そういう力になると思うんですが、その機を逃さず「平泉ってこういうところだったのか」ということを、もっとアピールできるようなことをさっきお話したように二つ、三つ考えてるんですが、そういう意味で藤里さんの平安時代にどれだけ素晴らしい浄土庭園がこの地にあったのかということを考えるべきだと思います。そのためには、さっき予算の話をちょっとしたんですけど、毛越寺さんなり、あるいは無量光院なりを、そのままそっくりできるだけ忠実に再現するためには、どのぐらいの予算が必要なのか、そういったふうなことを、例えば試算してみてもいいんじゃない

ないかと思うんです。例えばA案、B案、C案とあると思うんです。A案というのは完全に復元する。木造、宮大工的な、そういう技術も駆使し、基衡の造ったとおりの八百何十年前のとおりにつくりというのは、これはもう理想であって、おそらく一〇〇%不可能なわけです。そこでB案、C案というのは、どこまで妥協するのか。僕はコンクリートもいと思うんですよ。いわゆるこういうものだったのかということが、現実に訪れる人達が目の当たりに実感できるようなものですね。借景もそのまま、その地域の空気といいますかね、そののどかさというか、そういうものもそのまま残っているわけですから。これからあそこに高層ビルが林立する時代が来るのかもしれない。あるいは中尊寺の貫首さんとか、執事長も、あるいは毛越寺さんの幹部の皆さんも、幸いにしていい方々ですけれども、あと未来を考えれば、どんな人が出て来るかわからないわけですからね(笑)。そういう意味ではせっかかない方々が揃っている間に、そういうコンセンサスを形成してい

ただいて、それで具体的なプランを考えていただきたい。それがこの大矢さんのおっしゃってるパワーだと思うんですよ。ただ、「お願いします」じゃなくて、「我々はこれだけのものを守るんだ。そのためにはこのぐらいの予算が必要なんだ」という具体的なプランを持って、中央なり、あるいは国民なり、あるいは世界遺産の事務局なり、そういうところへのアピールが必要だろうと思えます。まあやっぱり自己主張が大事なところじゃないのかなという気がするんですけどね。そのために毛越寺の庭園というものを、どれだけ生かすかということでしょう。

それから金色堂、あれの覆堂の問題がありますよね。新しい覆堂になって、もう四十年近くなるわけですね。勿論空調もたいへん素晴らしい、もうあれで永久的に保存できるんでしょうけれども、ちょっと窮屈ですね。そういう意味での見直しというか、非常に難しいんだろうと思うんですけども。

佐々木　そうですね。昭和の大修理やるときも、

そこが最も皆さん議論のあったところでして、頑丈で立派に、しっかりしたものを作れば造るほど、しかし百年と保たないものを、それを将来壊すときはどうなるんだとか、じゃアいつでも取り外しできるもののほうがいいんじゃないかとか、いろんな議論ありましたですね。ただあの時代は、ちよつと「科学的」という言葉に引きずられて判断したと思います。それが結果として、機器に頼り過ぎた空調の失敗にも見られます。それをやり直して欲しいって文化庁に申し込んだら、それはできないのだと、これは「永久保存」という振れ込みで予算を取ったのだからと言う。じゃあ永久に改修できないんですかって詰問したら、まあここ二、三十年黙っててくれと。そこで、まあテレビに訴えたら、某テレビが実情を全国に放映してくれまして即、国の予算がついた、という経緯がございますんでね。やはり、みんなが、多くの人が事実を知ると言うことが、唯一の救いであり、支えになるんだと思うんですね。

中津 そうですね。だからあれがすぐに大きな覆

堂への改築が不可能であるとすれば、僕は模型をつくってもいいと思うんですね。ミニチュアというわけじゃなくて、いわゆる実物大の。今から十年ぐらい前、もうちよつと前ですかね。『芸術新潮』という雑誌がありましてね、あれで平泉を特集したことがあるんですよ。私もちよつと何か書かされたんで、余計に印象に残ったんですが、そのときに見開きで、もともとはこうあったんじゃないかという金色堂の合成写真が載ってましたが、覚えてらっしゃるでしょうか？

佐々木 ええ。

中津 小高い丘の上に杉木立の向こうに燦然と輝く金色堂が素のまま建っているわけです。これは勿論合成写真ですから、簡単にやれるわけですが、あれを見たときの感動というのは、私は忘れられないですね。ですから今の金色堂はいわゆる「ほんまもの」として、ちよつと狭い、窮屈だけれども、そっくりそのまま実物を残しておく。けれども本来はこうだったんですよ、というものを、江刺の方がいらしたら申しわけないんで

すが、あそこのふじわらの郷にある、ああいうちやちなもんじゃなくて(巻、もっとそっくり本物の金色堂を模造して山中に建てたらいいと思うんです。ただし、これは別に金を張る必要はないと思っただけです。それから中に本物の仏像を入れる必要も要も勿論ないし、ましてや御遺体を入れる必要もないわけですけれども、やっぱり見て満足できるくらいのもので、そういう実物大のそっくりのものを、いわゆる素のままの姿で、こういう姿であったのかということを実現できればと思います。私は夢を食って商売なものですから、最近出版業界不況で、霞も食ってまずけどもね(巻、主食は夢なものですから、実現性とか、そういうことではないことをすぐ考えるわけですけれども、そういった往時をストリートにしのべるような手法もいいんじゃないかという気がします。

僕は韓国に文化財ツアーみたいなので行ったことあるんですけど、びっくりしたのは、博物館に日本と言う国宝級の李朝の白磁とか青磁の見事な

ものが、当然たくさんあるわけですよ。ところがこれがほとんどがレプリカなんです。それは私達を連れてってくれた専門家さえも騙された。僕はたまたま通訳さんと仲よくなって実はレプリカだということを知ったんですが、そうしたらその連れてってくれたツアーのコンダクター、この人はテレビの「なんでも鑑定団」なんかに出てる方々より目の肥えた人なんです。その人が得々として我々を連れて歩いて、「これはこういうもので」と解説しておられた。たまたま僕は通訳さんと仲よくなって、二日目、三日目になって、「あれは本物なの」と聞いたらニヤツと笑って私の顔見て、「そういう質問をされた日本人の方、今までいません」というわけですよ。で、聞いたらレプリカなんですって。それはそれでやっぱりそれだけ精巧に、プロの目をこまかせる、まあこまかすという言い方悪いですけどね。その騙せるくらい技術を、彼らは培ってきてるんですね。ですから別に悪意でつくってるわけじゃなくて、やっぱりそういう大きな目的があるということなんで

しょうけれど、金色堂はそこまでやらなくとも、なんかこう素の姿といいますかね、もともとあった姿でどこか近いところに再現していただくと、いわゆる複眼レンズといいますか、こっちは本物、それがこういうところにこういう姿であったのかという、そんなふうなことでのアピールの仕方というのも、なんか考えていただければいいな思ったりします。

佐々木 中尊寺の事務所の中にも、若い人で非常にコンピュータができる人がいまして、ちょっと覗いたら金色堂が宙に浮いたり、曲がったりしてるんですね。「どうしたんだ」と訊いたら、自在に画を動かして見てるんですね。あのようなのを使って、見てもらうというのも、一つの方法かもしれない。視覚的には自在に変形していくが、厳然としてあるのは、経年、年を経た、八百年、九百年経た金色堂であります。

それで、これから最終的に皆さんにお話を締め括ってもらおうのですが、いまNHKで「ほんまもん」という朝番でやっていますが、その本物で締め

括っていたきたいんです。毛越寺の藤里さん、最後何か、これだけはこのごさいましたら、どうぞ。

藤里 毛越寺にかつてあった伽藍を復元するというのは、毛越寺一山の悲願です。悲願ですというと、具体化してるようですけども、実は明治のときもそんな夢を見た人がたくさんいました。現実にはそれはいろんな理由でできないわけですけども、平城京にいきましたら、朱雀門がたしか三十八億円できていました。これから平城宮跡の大極殿も復元するんだと、ほかに庭園もつくられました。すごいスポンサーがいるなと思ったら、やっぱり国だったわけですね。それでお金があればできるかという、そうではないことだと思ってるんですね。かつて日本中に何とか大仏というものがいっぱい造られ、なんであんなものを山の上に勝手に建てて、周りの方は文句言わないんだろうなと思っていました。さっきも景観のことを話しましたが、景観はみんなの財産じゃないのかと、そこへあのような巨大なものを、自分の趣味とい

いますか、エゴイスティックな世界で、造っていいのかと。毛越寺の伽藍を復元するならば、やはり本物を残したい、誰もがやはりそうなんだと、昔はこういうものがここに建ってたんだというものを残したいわけですが、それは技術的にも、金銭的にも、非常に困難なことです。ただ我々が忘れてならないのは、それを八百年前に想像した人達がいるということです。我々はいにしえの人々とどれだけ感性が違うんだろうか、あの方達の感性に我々は負けてるんじゃないのかなと思うときがあります。それですっかり墓守になって、かつてうちの先祖は立派だったと、お墓もこれだけ巨大だったと、私らはしっかり守ってるけれども、ただ守ってるだけだと。もうちょっと前向きな想像力を働かせていけば、きっとそれが大きな持続力になって、この文化遺産もまた未来に向かって、引き継がれていって、先ほど子孫は悪くなるかもしれないという話がありました、よくなるかもしれないと、もしかすると突然変異で素晴らしい人間が、我々の子孫にも生まれてくるかもしれない。

ない。そこまで何をどういう精神で繋いでいったらいいのかと、決して形あるものを守るだけが、文化財を守るということではありません。平泉には無形のものもたくさんあるわけですね。中尊寺に能があったり、毛越寺に延年があったり、それが時代の変遷、栄枯盛衰を耐える力であったと。無形のもものが、有形のものを、実は支えて今日まできたんだと、そういうことを私らは心して考え、振り返ってみて、そしてそれが未来の創造に繋がればいいなあというふうに思っております。

佐々木 ありがとうございます。黒沼さん、今度は何分でお話を……(笑)。

黒沼 「未来が見える」ということをお話し上げたいんです。今、私たちは、平泉・中尊寺の世界文化遺産に向けて、心を一つにすることが大切です。また心を一つにしなければなりません。先年の話です。岩手日報啄木賞を受賞した韓国人の学者でファン・ソンギョ先生から教わったことです。ファン先生は啄木の研究について民族を越えてこう話されました。

「韓国には『恨(うらみ)』は解く、という言葉があります」と取材で話されました。この『恨』という字は韓国語で「ハーン」というそうです。日本では『恨』は晴らすものですが、韓国では「ハーンは解くもの」だということです。その意味は、その人がなし得なかったことを、その人に代わって成す、ということです。

藤原清衡公が、「中尊寺建立供養願文」の中で、平等思想、恒久平和を訴えたわけです。さらに清衡公を初めとする藤原四代は仏教王土をつくろうとした。仏教王土はユートピアです。しかしそれは果たせなかった。

そこに私たちは参画できるのです。藤原四代はその理想を実現できなかったが、中尊寺は戦乱で焼失されずに残りました。また多くの先人たちが守り残してきました。それで今日があるわけです。

今、彼らの精神を、清衡公の精神を理念を受け継いで藤原氏が成し得なかったことを私たちが受け継がなければなりません。これがまさに21世紀への遺産だと思えます。

今、世界では、いいえ、昔から世界では平和が掛け声だけとなり、紛争と硝煙は消えておりません。21世紀は人間の愚考は繰り返されなければならずと信じたのですが、また世界では戦いが始まっています。

清衡公の理念を私たちが一生懸命「ハーンを解く」、成し得なかったことを私たちがやる。それが平和に近づく一步となるのではないのでしょうか。賢治は「世界全体が平和にならないうちは、個人の幸せはあり得ない」と言っています。清衡公や藤原氏の本を読んでいると、どこかのところで賢治とオーバーラップしてきます。私たちはまず清衡公をまた賢治を並列しながら、彼らが成し得なかったことをその人たちに代わってやるんだということが、歴史の中に未来が見えることでもあると思います。

佐々木 ありがとうございます。そこで、具体的に動く、判断し行動することが大事だということなのでしょう。この間『コリア・レポート』の編集長が、一関でお話されましたんですが、「ア

「フガンだけじゃないよ、北朝鮮が大変なんだよ」ということですね。原理とか、イデオロギーだけじゃない、あまりにも貧しい。それが日本のように、過剰生産物を大きなタイヤでつぶしてる国がどこにあるかって、怒りを込めてお話された。どんどん送ってやってくれ、イデオロギーは後でついてくる、国としての建前、そんなのは環境よくなりや大丈夫だよ、ということ話をしましたね。なんとかそれを実現すべきだと思います。

最後に、中津先生から「なぜ先生と言うか」というと、私より一級上なんです(笑)。この一級がどうにもならない一年の差でございまして、一つ違えば家来同然(笑)、高校時代にそう言われたのを覚えているわけでございます。どうぞ(笑)。

中津 私には、そういう難しいことは一切わかりません。私は俗物ですんでね、そういうなんか両サイドから非常にハイレベルなお話で攻められますと、非常に辛いですけれども、心がなごむ、心が豊かになるという環境を守り続けることは決して墓守などと卑下されるようなものではないと

思います。昔のものを守る、それはやっぱり分業ですからね。クリエーティブな仕事をした人もあれば、それをキープしていく人もある。やっぱりクリエーティブとキープというのは、私は両輪だと思います。そういう意味ではさっき言ったようにしえの心というふうなものをもう一度具現化して、それをさらに新しいものとして残すということも、キープの手段の一つじゃないのかなという気がするわけです。それともう一つ。平泉というのは黄金戦略のほかに経済戦略、それと文化戦略とあったわけですね。この経済戦略を支えたのは、黄金と馬なんですよね。平泉、この地域にかつて非常に豊かな牧野があった。今、坪いくらというところで、それを再現するのは難しいでしょうけど、なんとか馬の文化というものをアピールできないものだろうかと思うんです。さっきお話しした浄土庭園と金色堂ともう一つは馬。今その馬に触れられるということが少ないんです。まあ日高へ行けば、競馬馬はいますけどね。ああいういわ

ゆる経済戦略でもって繁殖させるだけの牧場ではなくて、もっと人間と馬が何千年の間触れ合ってきたような、そういうほのぼのとした温かいものが感じられるような場があればいいな、と思ってるんです。もし実現するんであれば、私は馬が大好きなものですから、そこへ来て馬丁をやってもいいくらい思い入れが実はあるんですけどね。そうした昔の姿をしのびながら、現代の人々の心がいやされるような、そんなふうな世界遺産登録をきっかけにした戦略が、なんか出てこないかな、という夢を持っておりませう。

佐々木 ありがとうございます。ちょうど時間になります。これからの時代は、逍遙、歩く時代なそうでございます。歩いて楽しみ、歩いて考える、そういう時代にふさわしい地域づくりをすべしと、それから、地域の人達の自律性が大事なんだということが言われております。

「過ちは繰り返します秋の暮」いい句をいつも思い出すんですが、三橋敏雄の句を引いたところで、今日の鼎談、この辺で締めたいと思います。

どうもありがとうございます(拍手)。

〔付記〕

問 先日の鼎談で、佐々木さんが触れられたコリア・レポート編集長の話を、もう少し詳しく聞かせてください。

佐々木 九月十一日の米中樞同時多発テロから、まもなく三ヶ月になります。そして、「異常時」の上に「非常時」が乗ったような(章柳大蔵氏の言、この二十一世紀の最初年も暮れようとしています。連日、新聞・テレビはアフガンの戦況を報じ、アメリカ司令塔の揺るぎない決意を伝えている。世界中が、この相手の見えない戦争が邪悪なテロ根絶のための正義の戦争だということを(アメリカ大統領の主張で)インプットされてきたわけです。

ただ、私がこの岩手の、ニューヨークからもアフガンからも、霞が関からも遠い地において、それらの情報から考えさせられたこと、もいくつかある。

その一つ、コリア・レポート編集長の辺真一

(ピョンジシル) 氏の話の話を聴く機会があったので、要約してここに紹介しましょう。

.....

あのようなテロが起こる可能性はアフガンだけではない。もう一つ、すぐ近くにあるでしょう、北朝鮮が。アフガンにしても宗教、原理主義・イデオロギーだけでテロに走ったわけではない。その前提に、あまりにも貧困という現実がある。貧困なら武器や核や、炭疽菌などの生物兵器など持ってないだろうと思うのは間違いですよ。最後の決定的な手段として。現に、インドもパキスタンも核を持っている。そして、北朝鮮からは日本の上を横断して三陸沖に何か飛んできたでしょう。そういうサインを見落とさないことです。それに、どう対処すべきか。どうしたら破壊を、最悪の事態を避けることができるのか、先進国日本は熟慮すべきでしょう。

日本は豊かです。この数年景気が悪くなったといっても、たとえば、主食の米や果物が

穫れ過ぎたといつては作ることを止めたり、収穫物を大きなタイヤで潰したりして、困ったと言ってる国、どこにありますか？なぜ、穫れ過ぎた分を北に遣れないか？国交が無い、その前に決着すべき問題がある、のはわかっています。が、飢えと寒さは待っていてはくれないのです。北の、子供たちが毎日のように死んでいるという現実から目をそむけないでほしい。命がつかなくて、心と心がつかっていけば諸々の問題も自然に目途がついてくるでしょう。幸い、朝鮮の国民性でもそういうのでしょうか、彼らは救済されてもそれを殊更に恩に着たり、肩身が狭いとか、そんな風には考えません。

いま、たまたまあなた方は裕福だが、それがいつまでもそうとは限らないでしょう。逆な状況だってあるかもしれない。そのときは倍にして返しましょうと胸を張って救援物資を受け取るでしょう。それでいいのです。そういう国民性の違いをお互いに知って、認め

合う、それが真の国際交流です。日本のひとは、相手に自分と似ているところがあれば、そこを取って認める——。そうじゃなくて、相手の自分と違うところを認めあうことが大事です。これは、浅薄な友情論なんかじゃなくて、グローバルな国際化時代にどう生きてゆけるかという選択であり知恵でしょう……。

……………

記憶を頼りに成文してみました。さて、みなさんはどう思われますか？

その北朝鮮が、ロシア・中国を後ろ盾にして対米交渉に打って出ようとしていたことは周知のとおりですが、この米同時テロでその外交戦略の目論見が破綻した（ラジオプレス鈴木典幸氏報告）とすれば、「テロ支援国」に指定された北朝鮮は、いよいよ孤立を深めていくしかない。これから、どう出てくるか！。

一体、なぜアメリカは狙われたのか。「テロ原因論議」が高まっているともいう。それよりも、アフガン攻撃は真に正義のための戦争なのだろう

か。「米軍行動を報復攻撃などと表現したりするのは公正を欠く報道だ」と「産経抄」で繰り返し強調しているが、当の「産経新聞」の記事にこれまで「報復準備」「報復攻撃」の見出しがしばしば大書されている。

いつの時代、どの国でもやむを得ない事情や、民族の主張もあろう、が、戦争に正義はない。まして「英霊」などというのはそう奉っておかなければならないからであって、実際は、「中尊寺供養願文」に述べるごとく、一人一人はただ命を落とし、命を奪われ、故なくして死に至らしめられた「冤霊」と称すべき、というのが歴史から身についた私の視座です。

そして、実習船えひめ丸の沈没に悲憤し、テロ・報復を非難するだけでなく、六十年前の十二月八日という日を、日本人はパール・ハーバーをアメリカの人々と同じように記憶しておくべきである、とも言いたいのです。

五年の盛岡

志 賀 かう子

盛岡五年間の折ふしを、ゆるくに流れていく雲を追うように振り返る余裕が生じてきた、そんなこの頃となりました。

それにしても五年の月日はなんと足早やに過ぎるものでしょう。子どもの時間はけっして急がなかった、そんな世迷言を胸に吹きながら、時の重さばかりは万物に公平だと心得ながら、それでも、はや過ぎる、はや過ぎると嘆くことになりませぬ。

私の盛岡は五年前に始まりました。盛岡市は中津川与ノ字橋に近い河畔にある、深沢紅子野の花美術館の初代館長として迎えていただいたことにはじまりました。

その二年前に宇都宮市で共に暮っていた九十一歳の父が逝き、兄夫妻は岩手と東京間を往き来する多忙な生活、したがって六十歳近くになっても

私は途方に暮れる有様でした。

そんなさ中に私は求めていた、これには私への励ましがあったはずで、非才を承知の上で、その好意に応えよう、と私は思いました。

画家深沢紅子こうさんとは昭和三十八年にはじめて会い、その人の稀有なまでにあなたたかい人柄に、その時すでにとりことになりました。

その後しずかに交流は続き、展覧会を催すとあれば、宇都宮から東京へ、盛岡へと拝見にあがったものでした。

やがて一関市北上書房・間室ゆたかさんの手により拙著『祖母、わたしの明治』が上梓のはこびとなり、紅子さん（実際には先生と呼んでいる）はこころよく装丁を引き受けてくださった。夏の軽井沢は堀辰雄山荘の庭に咲くシキンカラマツの美しい絵で、さらには兄の師である田宮虎彦氏の過分な跋文をいたゞくことで、つたない内容を補っていただいたのでした。

図らずもその著は翌年第三十一回日本エッセイスト・クラブ賞を受賞、それからは紅子さんの図

録や画集に一文を求めていただくことになり、絵のモデルをつとめることもありました。

モデルをつとめた初日は二月、めずらしくしこたま降った雪のあしたでした。窓外の雪の眩しい中でシジュウカラが囀っていた様とともに、いやそれ以上に画家のその時ばかりは鋭い視線、そして一挙一動を知り得たことが私の宝となっています。

静止の姿勢で黙している間に睡魔とたたかうこともあり、すると紅子さんは絵筆を休ませることなく語りかけてくれました。幼い日の盛岡の風物のこと、一瞬にして目が冴えるようなご自身のためらいの話、その深刻な内容すら、自問自答の眩きのように穏やかに語ったものです。そのことどもは十年余を経ても私の中に宿題となっています。その制作は“親しい人、優しい人展”とする一連の女人像、他の三十七人のモデルもそれぞれが、異なる深沢紅子とのかけ替えない時間を経験したことをやがて知りました。

紅子さんはそうしたお人でした。その人の美術

館をあずかってからの日々、美術の門外にある私なりに、その画家の秘めた凄さを作品の中により取るようになりました。激しさを露あらわにすることによしとしない盛岡人特有の美意識が、紅子さんにあっては一層独自なかたちを作りあげていたと思うのでした。

つい先頃まで、当地栃木県立美術館において一九三〇年代から第二次世界大戦直後までの女流画家展『奔せる女たち』が催され、私は二度足を運びました。それは、女性が自身のほとぼしる創作への情念を作品の中に果たすことがきわめて困難な時代に、画家たちがいかに社会と自身とたたかい描いたか、を伝える秀れた展示となりました。

三岸節子、桜井浜江、桂ユキ、丸木俊、森田元子そのほか有名無名を問わず、多くの作品に私は感ずるものが大きく、興奮すらおぼえました。小倉遊亀、三谷十糸子の世界に日本画の糸の乱れもゆるさぬ清澄の美しさと日本古来の床しい文化をいたいまでに懐しみ、異色の片岡球子の強靱な意志の表現に息を呑みました。女優に生まれつい

たような山本安英や、当時けっして平穩な生涯をあゆんだとは思われない混血の美貌ヴァイオリニスト・巖本真理のポートレートなども写真部門で展示されていたのでした。

強烈な個性の中では、これといって人目を引かない三点の深沢作品の前に、私は幾度もたたくみました。もとより身量はあるとしても、作品に優劣を判断する力が私にないとしても、私にとりそれらは懐しく、いとおいしいものでした。

鎮まる美の奥に、ためらいがたらく見えるのでした。花はそのままに美しい、人はそうはまわりません。たがそのモデルがかかえ持つ美の一点を紅子さんは描いたのでした。その中にためらいが匂うのです。生へのためらいのようなものです。これが紅子さんの魅力ではないか、と私は考えました。

人はみな自らにためらうものがある、気付かないとしても人はいつもためらっている、そんな私たちに安堵をもたらしてくれるものが深沢世界にあるのではないか、自らは描くことの叶わぬ絵の

中に、そんな心鎮まる空間を得ているのではないか、と問いつ追いつ思ったものでした。

美術館での五年の歳月、数知れぬ出会いをいただけ語れば際限のないことです。こんなこともありました。

あきらかに農家のおばあさま、くの字の腰に両手を当てて明るい顔で語りかけてきました。

「いやあ、紅子先生のヤマトリカブトはなんと美しい！ わだすの庭にも咲くの、毒があるとおもって相手にしませんでしたあ。これからは、あやあ、きれいに咲いたこたあって語ってやりますう」と言うのでした。

紅子さんはいのちの美しさを求めた旅人でした。ためらいながらも生きて終る、人や自然界の造化の不思議を、自らに問いつ語りつ描きつづけていのちを全うした人ではなかったか、そう実感させられました。

紅子さん夫君の省三画伯が他界されたのは平成四年三月二十四日、自身の九十四歳誕生日でした。入院中の私が電話でお悔みを申し上げての紅子さ

んのお返事はこうでした。

「わたしはネ、おじいちゃんより一日でも長生きしなければと、ずうっと考えておりました。そのおじいちゃんが、いい顔で静かに眠って、わたし、とーても喜んでおりました。どうぞ、あなたも喜んでくださいませ。」

私はただ絶句、悔みのことばにこんな返事を知らなかったのです。

そして一年が経ち、紅子さんは身辺すべての整理をそれとなく済ませ、ご子息夫妻と共に好物のうな重を堪能した夜、ベッドに眠ったまま、九十歳の誕生日の翌朝に不帰の人となりました。じつにみごとに九十年を歩み切って、夫君逝って一年後の同じ日に、静かにひとり旅立ちました。

私のあとに館長を引き受けられた画家の重石^{こいし}子さんは深沢省三、紅子夫妻の愛弟子、その重石さん、紅子さんが彼岸に向かった日は入院中であつたよし、眠り浅い深夜二時頃にパジャマ姿の女性が訪れふとんの上に優しく被いかぶさつたというのです。そのことは重石さんにとり少しも苦痛

ではなかったそうで、重石さんはやがて深い眠りに落ちました。

紅子さんは、信頼する弟子に後事を託したかったにちがいありません。私はいささかのご縁をもつて、紅子さん美術館のいささかの基を作らせていたぐきました。そして今、深沢紅子野の花美術館は、重石さんのもとで本格的な地方美術館としての新しい出発をすることになりました。その将来を見つめるたのしみが私に与えられたのです。

その私はいえ、今年六月、美術館役員改選を機に美術館をしりぞき、ただ今はとちぎ生涯学習文化財団の企画顧問の仕事をし、その後九戸郡種市町民文化会館々長の職をいただきました。肩書きは大きくても立場はあくまで脇役、けれどもいただいた場面にあつて私に果せる何があるかを探つて生きていくことであろうと考えるのです。

二つの言葉が常に私から離れません。一つは中尊寺貫首・千田孝信先生から、私が美術館着任後にいたゞいたお手紙の一節です。「つまりはあなたも私も、中津川の鮭のように、父祖の地に廻っ

て来たのですね」とありました。千田貫首のご尊父は江刺地方のご出身、貫首ご自身は栃木県日光市でお育ちになりました。私は大東町と金ヶ崎町の血を享けながら栃木県に生まれ育った、そのことをお指しになってのこと、感ずること深いおことばでした。

そしてもう一つ、「人は老いるほどに、次代に何かを託そうとする本能に駆り立てられる」というものです。医学者のことばでした。

二つの言葉の重さの交錯する日々にあります。

美術館前を流れる中津川には、九月半ばとなれば鮭が産卵のために遡上してくるのでした。それは氷点下の冬となっても遅いランナーは辿り着くのでした。凄絶でした。満身創痍となつてつがいの群がわれ先に産卵の場を選び、鼻先や尾で産所をこしらえ産みつけ、一方が白子を振りそそぎ、あくる朝には白けた遺骸となつて鳥につつかれる、無残にも荘厳なすがたでした。

関東の地にも初雪が舞つたこの季節、中津川の鮭の新しいのちの粒は水面下で春を待っている

のでしょう。川岸のメメンコ（雪柳）の芽も初夏のワスレナグサも、新しいのちの育みはぐくを忘れてはいないでしょう。

内海隆一郎の小説『鮭を見に』がおもい出されます。一介のサラリーマンが定年を待つて北海道に鮭の産卵を見に、止むに止まれぬ想いに駆り立てられて赴く、結果は彼が心に描きつづけたためめくまでの壮絶な光景ではないのですが、彼はともかくにも鮭産卵の群でもり上がる川面さながらの想いに促されて、その光景に遡つたのです。もとより内海文学の世界はそんな単純なものではありませんが、本の帯に綴られたコピーが忘れられません。

「男はみな、その胸に遡るべき川を持っている。息が堰を切る妬ましきでそれを読みました。

せせらぎとて水みなもとから発する川ではないか、などと考えつつ、両手で暗中进行を掻き分け掻き分けして辿るべき場を探っている、私はそんな日々にもあります。

（エッセイスト・種市町民文化会館々長）

再見・大池

及川 司

中尊寺境内が国の特別史跡に指定されたのは昭和五十四年のことである。数多の国宝・重要文化財を有する平安仏教美術の宝庫としては、随分遅い時期の指定と感ぜずにはいられまい。これは実に十二世紀往時の伽藍の具体性に欠いていたことに起因している。

鐘楼に吊るされる康永二年（一三三三）鑄造の梵鐘に刻まれた銘文は、建武四年（一三三七）の火災で一山悉く灰になったと伝える。致命的な打撃を与えられ、失われた伽藍の再建はままならず、法燈は絶えぬものの幾百年の歲月は創建伽藍を叢林に埋もらせてしまった。

現在の堂舎は多く近世以降のものであって、往時をそのまま伝えるものではない。今の景観が整ったのは天正十九年（一五九一）仙台藩領となって

その手厚い保護を受けてからである。寺容を整えていく段階で、地形上にも改変が加えられ、故地も消え入り、伝承とわずかな露傍の石のみ残ることとなった。十二世紀に整備された平坦地ほど土地利用の頻度は高かったことであろう。であるから、当初伽藍の姿が見えないのはごく当然であった。

特別史跡の指定へと導いたのは藤島亥治郎氏を团长とする平泉遺跡調査会による昭和三十四年（四十三年）の学術調査の成果に他ならない。この長期に及ぶ調査によって伝金堂跡地区、伝多宝塔跡地区、伝大池跡地区などでの重要遺構の発見につながり、古代末期における奥州藤原氏の東北経営を考える上での重要な歴史的意義が認められたのである。

この時の調査報告書である「中尊寺 発掘調査の記録」（一九八三中尊寺）には、生きた寺での調査の労苦がにじみ出ている。結果的に発見遺構は「吾妻鏡」文治五年注文（一一八九）に記載された平泉終末期の状況に類似が認められるが、「供養願文」

(天治三年一一二六)に見合う創建期の堂・塔・池・橋などの遺構は見つからなかった。特に伝大池跡については、完成された姿は認めることはできないと判断された。

時を経て町内の様々な遺跡での調査が増加し、また全国的な中世遺跡研究(特に土器・陶磁器)の進展、あるいは年輪年代測定法等の科学的分析の援用も加えて、総合的な比較のもとで遺跡の年代の検討が可能になってきた。特に平泉では、かわらけは十二世紀前半期にはまだ十一世紀以来の在地ロク口土師器の系譜をひいており、このロク口かわらけが年代を特定しうる指標になる。なお平泉で手づくねかわらけ(京都系土師器とも称する)が使用されはじめるのは十二世紀中頃の基衡の段階である。

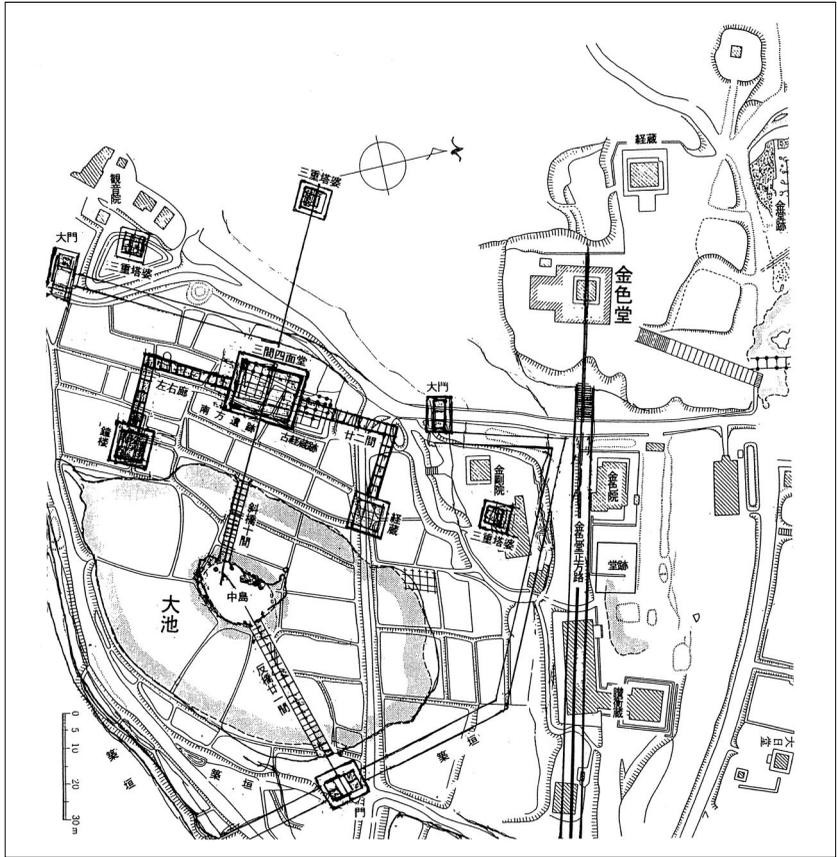
創建期のかわらけの発見は中尊寺金剛院池辺坊調査(平成三年)を嚆矢とする。整地層下の黒色土から大量に出土したロク口かわらけは十一世紀以来の在地土器の特徴を留め、手づくねかわらけや常滑・渥美等の国産陶器は一点もなく、中国産白

磁壺のみ(大宰府編年Ⅱ系・化粧土有)が伴うもので、年代としては十二世紀初頭く前葉と考えられ、清衡期の指標土器となった。

また金剛院の西近接地の弁財天堂付近では、大池跡への導水上流部と目される溜池状遺構を発見し、堆積土下層から金剛院下層タイプとそれに後続するロク口かわらけ群が出土した(平成九年)。

更に新讚衡蔵建設の調査(平成九年)では、複層の地業の最下層より断面V字形の大溝が見つかった。大溝には切り倒した樹木を大量に投棄し、人為的に埋め立てていた。この人為埋土中から前記の金剛院下層タイプのかわらけが数点出土した。

この大溝の埋め立ては近隣を含む大規模な造成に関わる地業と見られ、とすれば金色堂や大池跡整備に関連する地業を想定できよう。そして改めて金剛院下層タイプのかわらけの年代は清衡期のものと断定される訳である。更に同等に重要なことを付け加えれば、この大溝の開削は創建期以前と考えられ、清衡以前の中尊寺前史に関わる遺構といえよう。



斜線建築は現存する建築

図-1 中尊寺蔵供養願文伽藍構想図（推定復原案）
 藤島玄治郎 1998
 「研究ノート平泉中尊寺の構想と現実」
 『建築史学』第30号より引用

このように創建期の遺構・遺物が、中尊寺の大池跡北西近隣から集中して見つかったこの地区にこそ、清衡による開発を認めうるのである。更には大池跡が聖域の如く今に池の形を伝えてきていることからみても、その実在は素直に受け取るべきであろう。造成途中で放棄していれば、これほど利用価値のある平坦地は山中で他にはないのであるから、何らかの土地利用に供されたはずである。

いよいよ初期伽藍と目されるこの地区の再検討が課題となってきた。平成八年度に始まった中尊寺内容確認調査（十九年計画）は継続中であるが、前述のように弁財天堂付近では大池跡への導水上流部と目される十二世紀初頭からの溜池状遺構を発見し（平成九年）、大池跡北東部では十二世紀の池の汀を見出し（平成十年）、現在は大池跡東部の築堤部と弧状をなす畦畔付近に調査の手が入っている。

また金色院境内と金剛院境内との間の斜面地下には十二世紀石敷き古道が発見され（平成八年）、位置からみても金色堂正面の参道と見なせる。この

古道の続きはまだはっきりとはしないが、大池・金色堂を含めた一帯のロケーションはかなり想像しうる状況になりつつある。具体的には既に、藤島亥治郎氏が「研究ノート 平泉中尊寺の構想と現実」（一九九八 建築史学 第三十号）で、中尊寺蔵供養願文伽藍構想図として示されておられる。この図を引用し掲げさせていただく。

この構想図については首肯すべき点が大いにあり、さすがと思わざるを得ない。実際に現地に立って想像をめぐらすと、金色堂へ向かう参道を歩きながら次第に眼下に見えてくる大池伽藍の壮大さ、そして参道突き当たりの階段を登りつめて眼前に現れる金色堂の壮麗さ、あるいは大池の中島あたりから仰ぎ見る珠玉のような金色堂の輝きたるは、初めて見る者は息を飲む光景だったにちがいないと実感できる。

堂塔の建築遺構など未解決問題はあるが、大池地区の今後の調査に期待するところは大きい。

以上、大池跡付近についてのみ焦点を当ててきたわけであるが、山内では他でも古手のかわらけ



上空から見た大池跡（平成9年撮影 平泉町教育委員会提供）

が見つかっている。橋口定志氏らが纏めた「中尊寺収蔵の出土遺物整理報告書」(二〇〇〇 中尊寺)では、佐々木満氏が過去の伝三重の池跡の発掘出土品に十一世紀末頃ともみなされる最古期のかわらけが混在していることを指摘している。近隣の真珠院でも同様のかわらけが見つかっている(平成七年)。このように大池跡地区のみならず、山内には未知の初期遺構の存在は予測されるのである。

昭和三十二年に金堂前第一次発掘調査を行った中尊寺発掘の草分けでもある故・板橋源氏は、同調査概報(一九五八 「平泉中尊寺大金堂前第一次発掘調査概報」岩手大学文学部研究年報第十三巻)の中で中尊寺の遺跡について次のように感想を述べられた。

「略」伝承されている遺跡地には礎石のごとき地上徴証が認めがたく、そのため間接的徴証となる微細な痕跡の稀薄化と消滅とが危惧される。境内には思はざる所においても何等かの遺跡があるらしく、この点からいうならば一山いたるところが慎重に取扱はれなければならない史跡である。

「略」と。

初期伽藍のみが重要といっているのではない。中尊寺の歴史は断片を語っては済まない。改めて板橋氏のこの言葉を噛み締める次第である。

(平泉町文化財センター)



金剛院下層かわらけ

句碑のこと 蓮のこと

佐々木 邦世

中尊寺境域の南麓に、加藤楸邨の「かんた邯鄲」の句碑が建ったのは、平成五年十月のことである。

邯鄲やみちのおくなる一挽歌 楸邨

楸邨が創刊した俳誌「寒雷」は、昨年六十周年を迎えた。

盛岡を拠点とする「草笛」の生みの親・宮慶一郎氏は、昭和四十年より楸邨に師事してきた。といっても、私は楸邨句碑の建立を発起したのが縁で、その後、楸邨だけでなく、少々俳句に関心をもつようになって、宮氏の作品も俳誌を繰りながら目にしただけのことではない。それでも、

達谷にをとこ帰りぬ青楸

ひたすらに邯鄲を待つ石のいろ

楸邨碑梅雨茸二つのみ許し

などの句には、鉛筆でいつか印を付していた。若き日に達谷を逍遙し、その書屋を「達谷山房」と号した楸邨である。私など、一度、師のお宅に伺って数刻その警咳に接したた

けであるが、それでも、何か大きなものが私の中に残ったような気がしている。宮氏にとっては、あの楸邨は、俳句の師であるとともに人生の師でもあったようである。

一昨年、宮氏から「草笛」六月号にエッセイ寄稿依頼のお手紙を頂戴した。戸惑いつつ、悦んで「中尊寺ハス」余話——と題して書かせていただいたのであったが、それからは、「ハス、今朝咲きましたヨ」などと、まるで旧知でもあるかのように気楽に宮氏に電話をかけたたり相談したり、いま、思い出しているは恐縮している。

蓮は実に泰衡殿の泣きつ面

まぼろしにあらざる蓮に仏たち

毘陀多カシダと蜘蛛のおん前朱唇佛

大年の金鶏山に月の雪

〔寒雷〕より抄出

足元を彼岸の水が流れるる

光堂春三日月のかかりたる

蓮散華泰衡公の和魂は

〔草笛〕より抄出

□ 冬のあぢさゐ

死ぬるとは石となることただ炎暑

死ぬまへに冬あぢさゐを見ておかう

掲句は、昨年十月の「寒雷」記念号に載った十句のうちに見えるものである。そして今年になって、「草笛」四月号の慶一郎抄出「一誌一詠」の最後に、

うしろから大きい何か十二月 山崎聡（饗焰）

をあげている。それこれ併せ思うと、何かしら死がそう遠くないような予感でもあったものであろうか。

四月、私が執事長に就くや、早速お便りをいただいた。

「……ご尊父実高先生のことなどとも思い起こしています。最も煩瑣ご繁用の、大事な時期……と気づかっていた。そしてそれが、宮氏から頂戴した最後のハガキとなった。万年筆の、例の格調ただよう字である。

宮慶一郎先生が八月二十日ご逝去された、ということ
を私が識ったのは、諸事に取り紛れて迂闊にも暫日経てからであった。訃報に接し、昨年、中尊寺における芭蕉全国俳句大会の折の、私の、青柳・楸邨の話を宮先生は終始お

付き合いくださって聴いていた、あのときのお顔が
想いだされた。

「楸邨の一句と問はれ鱒雲」（森田公司）というのがあ
ったが、宮先生の一句といえは何なんだろうか。そんなこ
と素人が言うも憚られることだが、「俳句研究」昨年の一
月号に「山河悠久」と題する宮氏の一文があった。

日高見の四季は北上川の春にはじまる。

岸辺の柳の芽吹きが北を指して遡る。日毎に、確実に
遡及する。関山平泉の辺りは大河の相、穏やかに水面を
押しつつ湾曲する。（略）

古代の蝦夷、安倍氏、藤原氏四代の興亡すべてを北上川
は知り尽くす。

邯鄲やみちのおくなる一挽歌 楸邨

六五トンの自然巨石碑が平泉金鶏山（の奥）に建つ。

祭果てたりいづこの河も海に向き 慶一郎

（略）「中尊寺ハス」が平成の世に花を開いた。
往時茫々の念、已まぬものがある。

修羅いまだ雪はまぼろしの甲冑に 慶一郎

この、「祭果てたり」が、なんとも心にのこる。

ここまで稿が進んだとき、行きつけの本屋さんが「俳句研究」2002「年鑑」を届けてくれた。その巻頭のグラビア「平成十三年・俳壇の一年」へ「逝きし人びと」の遺影が一点あり、五月に亡くなった能村登四郎とともに、宮氏のいつものお顔があった。

謹んで、ご冥福を祈るばかりである。

□ 種袋のこと

浜松市にお住まいの間淵うめ子様から、七月三十一日付けでお便りをいただいた。そこに、泰衡公首桶のハスの実について考察する上で貴重な事実が記されていた。間淵様の句を知ったのは、三年前の、拙著『平泉中尊寺——金色堂と経の世界』がすでに再校の段階に入っていたころである。一ページ分になるがここに引いておく。

「蓮托生」 俳誌「草笛」が主宰者の宮慶一郎氏か送られてきた。毎号いただくので、いつものようにページをめくっていた。ふと、

逆縁の柩ひつぎに母の種袋 間淵うめ子

の一句が目にとまった。私は、「種袋」の活字に釘付

けになった。作者の兄にあたる人への葬送の句、と説明がある。この、「種袋」とは何なのか。どういう思いで種を柩に入れたのだろうか。宮氏に手紙でお尋ねすると、作者の現住所は浜松市だが、生家は秋田県とのことで、あるいは、そういう風習でもあったのだろうか。すぐに、一面識もない作者に宛てて作品の背景を伺った。

返書には、生家は北秋田郡、米代川の上流の合川町（旧落合村）で、しかし、村の風習というわけではなく……、と状況が詳しく書かれていた。長いシベリア抑留に加えて病身の兄は苦勞が多かった。母がしていたように、母の縞しまの種袋しほに南瓜かぼちゃの種とか花の種を入れていた。それが柱つちに吊つるしてあったものを、せめて彼あの世でまた種を蒔まき、後からゆく母を待っていて欲しいと、愛いとし子の柩ひつぎにお菓子を入れてやるように、母になり代わって納めてやったのだという。袋のことがふと気になって、咄嗟とつさの思いつきであったことが丁寧に書かれてあった。

ところが、今度のハガキにはこう書いているのである。

七月三十日の昼、テレビのスイッチを入れましたところ、中尊寺蓮の放映がありびっくり、今生では、美しく咲いたところは見られないとあきらめておりましたものですから大変感激致しました。(略)

あの美しさこそ、やはり天上の花なのでございましょう。七月一日に「草笛」五十周年で盛岡へ三泊し、この十四日に生家の母の一周忌で、その暑さと疲れから、只今ふ臥せておりますが、母の一周忌の折に、同級生と申ししても村の古老ですが、村を出て六十年の私には何の記憶もない事ですので、昔の葬の事を聞きましたところ意外の事実を知りました。

それは大事な人の柩には必ず七種の種を入れて葬る例だった、との事でございます。火葬の今でも、葬儀社で紙の袋にそれらしきものを入れるらしいとの事でした。私の行動は祖霊の声だったのです。

「私の行動」とは、いうまでもなく前掲引用の、種袋の種を兄の柩に納めた、咄嗟の行動のことである。

そのときは別に、村の風習とは思わなかったのだが、知

らず、昔からの葬の習俗を行っていたわけである。

首桶の蓮咲かせたる甕かぶに冬 間淵うめ子・草笛



以上で、今回の回想を締め括るつもりであった。が、今朝、寺に出勤の途中、境内大池跡の発掘現場から担当の及川司主任が駆け寄ってきた。

「昨日、カワラケが出た池底跡から、さっき、蓮の種が入っていたハチスを掘り出しました。それこそ真正銘の『中尊寺ハス』ですね。その辺りに実種零れてないか、今探しているところです」

少し紅潮した面持ちの彼を見ながら、私は自分達を超えた何かに、これも書けと、書かされているような思いにまた浸っていた。

ついでに、机辺にあるこの一・二年の俳誌の中から、目につくままに句を拾っておくことにしたい。

「寒雷」

地吹雪の凧 <small>な</small> ぎ一瞬や光堂	岩崎豊満
泰衡の首桶 <small>くづ</small> ここぞ花はちす	山本一糸
弁慶堂仰ぐそびらや青田風	清水芳子
達谷忌北のまほろば青々と	川代くにを
蝉のこゑ超音階にひらいつみ	同

みちのくのひかり押しゆく青田風 江中真弓
「みちのく」

黒揚羽ついとそれたる能舞台 砂金青鳥子
虎落笛ものがりぶえ人影もなき能舞台 斉藤その女

秀衡忌紫衣百僧の菊の寺 同
「草笛」

送り火の燃え尽くるとき皆無口 佐藤幸子
能楽堂木枯荒ぶばかりなり 小野寺亨

背に闇を面に火の色新能 同
鞘堂さやだうに人影のあり木下闇 砂金青鳥子
川底を燃やす夕焼義経堂 佐々木道子

「河北俳壇」
ひぐらしの扉をたたく金色堂 丹野重男

なお、中尊寺に、ことに平泉芭蕉祭俳句大会の発起にご尽力いただいた故遠藤梧逸師の十三回忌にあたって、梧逸忌の人を拾ひて枯野バス 斉藤その女
が特選・梧逸賞を受賞した。作者の斉藤さんは中尊寺の門前に住んで、俳句歴、半世紀におよぶ。
(執事長)

研究／出版

平成12年11月～平成14年1月

〔編著書〕

『奥州藤原氏の時代』（吉川弘文館）

大石直正

『奥州藤原氏五代』（河出書房新社）

大矢邦宣

週刊・古寺をゆく『中尊寺』（小学館）

『平泉文化研究年報』一号（岩手県教育委員会）

岩手県教育委員会文化課

『いわて 未来への遺産 古代・中世を歩く 奈良～安土桃山時代』 岩手日報社編

『白の国の詩』2002/1〈特集〉平泉文化と東北文化 東北電力㈱

〔論文〕

「二〇世紀北奥における衣関成立試論」『岩手史学研究』八四号

菅野成寛

「関山中尊寺にみる伝承と史実」『山家学会紀要』四号

菅野成寛

「鎮守府押領使」安倍氏権力論

『六軒丁中世史研究』八号―大石直正先生古希記念号― 菅野成寛

「あかうそ三郎」―同記念号―

遠藤 巖

「中尊寺領の村々の歴史的性格について」―同記念号―

入間田宣夫

「藤原国衡・泰衡兄弟と源義経」―同記念号―

前川佳代

「平泉藤原氏と鎮護国家大伽藍一区」―同記念号―

丸山 仁



「トヤカサキ木簡について」『西村山地域史の研究』一九号

八重樫忠郎

「鎌倉・南北朝の平泉」『源頼朝と葛西氏』（葛飾区郷土と天文の博物館）

八重樫忠郎

「平泉遺跡群のロクロかわらけについて」『岩手考古学』一三号

羽柴直人

「秀衡の持仏堂」『京都大学文学部研究紀要』四〇号

上原真人

「八〇〇年前のハス（中尊寺ハス）の開花」

『恵泉女学園園芸短期大学研究紀要』第三二号

長島時子

〔報告書〕

『志羅山遺跡発掘調査報告書（第四七・五六・六七・七三・八〇次）』

岩手県埋蔵文化財調査報告書第三五二集

岩手県埋蔵文化財センター

『中尊寺収蔵の出土遺物整理報告書』

中尊寺

〔自主学习〕

「奥州藤原氏のミイラその真実を探る」

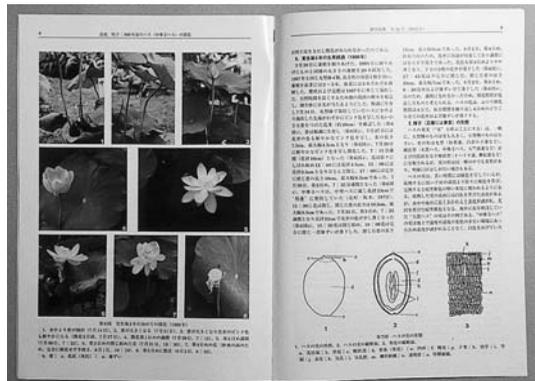
東京都 桜蔭中学三年 藤井真妃香

〔ガイドブック〕

『中尊寺を歩く』（中尊寺）

中尊寺仏教文化研究所編

※なお、平成十三年十月六～七日、盛岡市において「都市・平泉」成立とその構成」をテーマとした日本考古学協会二〇〇一年度大会が実施された。



新指定の国宝 「金字宝塔曼荼羅」

中尊寺大長寿院所蔵の重要文化財「紺紙著色金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅図」十幀が国宝に指定された（六月二十二日官報告示）。

この「金字宝塔曼荼羅」は、紺紙に金泥で、唐の義浄訳十巻本「金光明最勝王経」の経文を塔形に書写したものである。構成は一卷で一宝塔を建立するもので、文字は塔の最上部、相輪頂上から始まり基壇のところまで一卷の経が終わる。塔は九重塔であるが、十層に見えるのは初層に裳階があるからである。宝塔の周囲には、経意が描かれており、写経・造塔・経典解説という三つの功德を備えたものとして制作されている。幸いなことに十幀の全てが伝存している。

「金光明最勝王経」は護国經典として知られ、奈良時代には国分寺建立の思想的根拠となったものである。平安時代にも本経を講じ、国家安穩を祈る法会が宮中などで行わ

れていた。平泉においては中尊寺と毛越寺で正月・五月・九月に最勝十講が行われており（『吾妻鏡』文治五年九月十七日条）、「金字宝塔曼荼羅」はこの法会の際に使用された可能性が考えられる。

また、法隆寺「玉虫厨子」台座に描かれている有名な捨身飼虎の図は、本経「捨身品」に由来するものである。

「玉虫厨子」の捨身飼虎の図を思い出しながら「金字宝塔曼荼羅」第十幀の右下部に描かれている捨身飼虎の場面を見てみるのもよいであろう。ほかにも本経「大弁才天女品」や「大吉祥天女品」などは我が国の弁才天・吉祥天信仰に大きな影響を及ぼした。

捨身飼虎の場面をはじめとする、宝塔の周囲の経意絵は紺紙に金・銀だけでなく、白・赤・橙・緑・青などで色あざやかに描かれている。紺紙に彩色を施した遺例はまことに少なく、絵画資料として実に貴重なものである。

「金字宝塔曼荼羅」の制作時期については、中尊寺の寺伝では秀衡の時代とされるが、文献史料を欠いていて、制作時期を推定するには経意絵の技法様式から検討することとなる。有賀祥隆東北大学大学院教授は「経絵の諸相」

『信の美』所収 平成十二年 中尊寺) において「金字宝塔曼荼羅」制作の願主として基衡の妻女を想定されている。最近の研究としてここに紹介するものである。

金色堂棟木墨書銘には清衡にかかわる女檀「安部氏、清原氏、平氏」と三名が記され、また、基衡妻女は観自在王院を建立している。奥州藤原氏一族の女性たちが、どのように信仰へかかわってきたかを思い起こすとき、有賀氏の提唱された説に多くの方が大きな魅力を感じるのではないだろうか。

奥州藤原氏の遺宝の中で唯一の本格的絵画資料である「金字宝塔曼荼羅」が国宝に指定されたことは、「平泉の文化遺産」が「世界文化遺産」の国内推薦候補である「暫定リスト」に先ごろ登載された(平成十二年十一月十七日)時期でもあり、あらためて平泉文化の奥の深さを如実に証するものとして注目されている。(北嶺澄照)

「金字宝塔曼荼羅」に描かれた笠卒塔婆

清衡公が白河関より外ヶ浜に至る路々に建てた笠卒塔婆には金色の阿弥陀如来が絵図されていたというが、ここでは塔全体と阿弥陀如来の衣鉢は朱色になっている。



福聚教会中尊寺支部 東日本奉詠舞大会 「唱詠の部」 で初優勝

去る平成十三年十月五日に茨城県ひたちなか市で、福聚教会の東日本奉詠舞大会が開催され、福聚教会中尊寺支部が「唱詠の部」で初優勝した。

中尊寺では、昭和初期には御詠歌（唱詠）が行われていたという。それが次第に盛んとなってきたのは、太平洋戦争が終わった昭和二十年以降のことである。中尊寺支部の設立は昭和二十三年で、指導者は地藏院前住職の故佐々木亮徳師であった。その後亮徳師の志を受け継いだ佐々木高円師・佐々木仁秀師が熱心に指導を続けてこられた。

御詠歌の稽古は、月四回ほど行われているが、大会前には集中的に稽古を行ったもようであり、今回の優勝は日頃の研鑽の成果がみごとに結実したものと見える。



近年還蔵された 金字経・金銀字経について

北嶺 澄 照

中尊寺経は、奥州藤原氏が親子三代にわたって、中尊寺へ奉納された経巻である。その内容を分類すると次の三種に大別することができる。

A. 初代清衡公発願の紺紙金銀字交書一切経

B. 三代秀衡公発願の紺紙金字一切経

C. 二代基衡公と三代秀衡公が各々の亡父の追善供養のために発願した紺紙金字法華経

「中尊寺経」と呼ばれるものには、広義と狭義の場合がある。狭義の場合にはAのみをいい、広義の場合にはAとCをいう。この紹介における「中尊寺経」とは広義の中尊寺経を指している。

これらのうち、現在、中尊寺大長寿院には国宝「紺紙金字一切経（内十五卷金銀交書経）二千七百三十九卷」が所

蔵されている。金銀字経が十五巻のみで少ないが、これは近世初頭、豊臣秀吉の時にそのほとんどが持ち出されたためである。

ところで、中尊寺には昭和五十六年（一九八一）から平成十三年に至る二十一年間に、金銀字経九巻と金字経三巻が還蔵された。金銀字経九巻はいうまでもなくAの中尊寺経であり、その一部は調査研究の対象とされ、その成果が報告されているので左記に掲げておく。

①平成六・七・八年度科学研究費補助金【総合研究A】報告書『中尊寺金銀字経に関する研究』（研究代表者・京都国立博物館長藤澤令夫、平成九年三月刊）では入蔵となった金銀字経の「賢劫経巻第六」と「伽耶山頂経」が調査対象とされている。

②平成八・九・十年年度科学研究費補助金【総合研究A1】報告書『中尊寺を中心とする奥州藤原文化圏の美術工芸品に関する総合的調査研究』（研究代表者・東北大学文学部有賀祥隆、平成十一年三月刊）では入蔵となった金銀字経の「賢劫経巻第六」・「伽耶山頂経」・「諸法無行経巻下」・「大般若波羅蜜多経巻第七十七」が調査対象とさ

れている。

また、②と同じ金銀字経四巻が『中尊寺仏教文化研究所
／＼論集』創刊号（平成九年五月刊）に紹介されている（執筆・中尊寺仏教文化研究所主査破石澄元）。

尚、金字経三巻については調査研究がほとんど行われていないように、今後十分な検討が必要と考えられる。

ここでは、平成十三年中に新たに還蔵となった金銀字経四巻を含めて、この二十一年の間に還蔵された十二巻すべてについて、若干のデータを一覧表にして次頁以降にまとめて掲げた。また、平成十三年中に新たに還蔵となった金銀字経四巻については見返し絵及び巻首部分のカラー写真を掲げ参考に供する（寺報ぐらびあの頁参照）。

（中尊寺仏教文化研究所主査）



轉法輪經憂波提舍一卷

大藏経No.	尾題	見返縁	入藏年月	文字色	本紙縦	全長	見返横	紙数	界高	界幅
446	莊嚴劫千佛名経巻上	樹下説法図	昭和56年9月	金銀交書	25.70	977.80	21.00	18	19.80	1.70
220	大般若波羅蜜多経巻第五百五十六	欠	昭和59年8月	金字	25.10	1,053.60		19	18.90	1.80
262	妙法蓮華経巻第一	靈山説法図 五供養者	昭和62年9月	金字	25.70	977.30	22.00	19	19.10	1.90
425	賢劫経巻第六	樹下説法図 丘 五僧形	平成7年4月	金銀交書	25.60	894.00	20.50	17	19.70	1.80
465	伽耶山頂経	靈山説法図	平成7年12月	金銀交書	25.50	520.20	20.90	10	19.90	1.80
650	佛説諸法無行經巻下	樹下説法図	平成8年6月	金銀交書	26.30	709.40	20.50	13	19.70	1.80
220	大般若波羅蜜多経巻第七十七	靈山説法図 二供養者	平成9年3月	金銀交書	26.90	825.60	21.30	17	19.60	1.80
220	大般若波羅蜜多経巻第五百一十四	欠	平成12年3月	金字	25.00	668.20		14	18.80	1.70
220	大般若波羅蜜多経巻第七十	靈山説法図 二供養者	平成13年6月	金銀交書	25.80	883.20	21.30	18	19.30	1.70
220	大般若波羅蜜多経巻第一百五十四	靈山説法図 二供養者	平成13年6月	金銀交書	25.90	918.70	21.00	18	19.80	2.00
220	大般若波羅蜜多経巻第三百七十八	樹下説法図	平成13年6月	金銀交書	25.50	853.10	21.20	18	19.50	1.85
1533	轉法輪経震波提舎一卷	靈山説法図 四供養者	平成13年7月	金銀交書	25.70	487.00	21.10	10	19.90	1.70

注1 経巻は入藏された年代順に従って配列した。

注2 経巻Noの数字は大正新修大藏経の番号である。

注3 一覧表に関しては『中尊寺金銀字巻に関する研究』報告書（研究代表者・京都国立博物館長藤澤合夫）に準じ、本紙縦・全長・見返横・界高・界幅の単位はセンチメートルとし、見返縁の「比丘」は、光背のある比丘形、「僧形」は光背のない比丘形とした。紙数は見返しを除く本文（制作当初分）のみの紙数を示す。

〔陸奥教区宗務所報〕

第二部 中尊寺関係

□平成十二年

十一月十日

教区法要 二二八名 於中尊寺

如法写経十種供養会

十一月十日

教区研修会 八五名 於中尊寺

「教育の在り方について」

講師 瑞王院 山田能裕師



十一月十一日

一斉托鉢 教区六一名 於宮城県南方町

□平成十三年

二月二十三日

布教師研修会 二六名 於毛越寺

自由討議

テーマ 「今世に求められているもの」

進行 興福寺住職 嶽内真弘師

助言 中尊寺貫首 千田孝信師

四月三日

御修法普賢延命法奉修参勤 於延暦寺

中尊寺 千田孝信

四月八日

教区法要 二三〇名 於弘前市報恩寺

仏生会法要

法話 興福寺住職 嶽内真弘師

五月二十一日、二十二日

布教師東北・北海道地区協議会 於福島県相馬市

教区より七名参加

「天台宗の布教と総合研修センターの役割」

講師 天台宗宗議会議長 西効良光師



六月十九、二十日

保護司・民生児童委員会総会 於大分県別府

地藏院 佐々木秀円出席

七月十二日

人權啓発中央研修会 於宗務庁

金剛院 破石澄元出席

十月二十一日

一斉托鉢 教区二八名 於弘前市

□ 役職任免

天台宗典編纂所

(平成十三年四月一日)

編纂委員任命 円乘院 佐々木邦世

電子仏典員任命 瑠璃光院 菅野康純

開宗千二百年慶讃大法会教区事務所

(同年四月一日)

所長任命 大長寿院 菅原光中

(同年六月一日)

開宗千二百年慶讃大法会教区事務所

所員任命

積善院 佐々木仁秀

長楽寺 佐々木慎有

積尊院 菅野成寛

金剛院 破石澄元

□ 得度 (平成十三年九月十六日)

常住院法嗣 佐々木亮王

□ 経歴行階履修 (平成十三年三月二十五日)

開壇伝法 積善院法嗣 佐々木律秀

□ 住職任命・解任

任命 (平成十三年十月二十三日)

金色院兼務住職 中尊寺 千田孝信

□ 敬弔

(平成十三年四月三日)

真珠院寺婦 菅野フヂ 八十五才

□ 褒賞 (平成十三年十月二十三日)

布教功勞表彰 積善院 佐々木仁秀

観音院寺婦 清水哲 八十二才

□ 教師補任 (平成十二年十二月六日)

僧都 大長寿院法嗣 菅原光聰

☆ 伊豆諸島三宅島噴火救援募金

十一万九千円 中尊寺

(平成十三年四月二十四日)

少僧都 積善院法嗣 佐々木律秀

☆ インド西部大地震・中米エルサルバドル救援募金

十一万六千円 中尊寺

(同年九月四日)

僧都 法泉院法嗣 三浦章興

☆ アフガニスタン難民緊急支援募金

実施中

御神事能番組

五月四日

法楽
古美式三番

開口 清水広元
祝詞 菅野康純
若女 菅野宏紹
老女 北嶺澄照

大鼓 三浦章興
小鼓 菅原光聰
笛 佐々木秀厚
後見 菅野澄円

能

竹生島

ツレ 佐々木五大
シテ 北嶺澄照

ワキ 菅野成寛
ツレ 佐々木秀厚
ツレ 菅野康純
間 佐々木慎宥

大鼓 菅野宏紹
大鼓 佐々木長生
小鼓 菅原光中
笛 佐々木秀円

開口

清水広元

五月五日

狂言
仏師

シテ 破石晋照
アド 破石澄元

能

秀衡

義経 佐々木長生
シテ 佐々木邦世

ワキ 菅野康純
ツレ 菅野成寛
ツレ 佐々木秀厚
間 破石澄元

大鼓 菅野宏紹
大鼓 千葉快俊
小鼓 佐々木仁秀
笛 清水広元

秋の藤原まつり 中尊寺能

十一月三日

能

土蜘蛛

太刀持 佐々木亮王
胡蝶 佐々木長生
ツレ 佐々木五大
後シテ 北嶺澄照
前シテ 佐々木邦世

ワキ 菅野康純
ツレ 佐々木秀厚
ツレ 菅原光聰
間 菅野澄円

大鼓 菅野宏紹
大鼓 千葉快俊
小鼓 佐々木仁秀
笛 清水広元

執務日誌抄

平成十二年十一月

十三年十一月二十四日

平成十二年

◇十一月

- 一 日 秋の藤原まつり開幕（雨天）
藤原四代公追善法要
郷土芸能奉演（平泉町赤伏神楽）。
- 二 日 菊供養会
岩手県教育委員会文化課伊藤学
司氏来山（貫首、執事長応援）。
- 三 日 能「枕慈童」（能楽堂）
春季神事能五十年勤仕奉告
素謡平泉喜桜会「橋弁慶」

- 四 日 独吟「八島」岩瀨勝次郎
「安宅」千葉初夫。
町勢功労者表彰式（執事長
於役場）。
- 五 日 福島教区常光寺様一三名団
参（貫首挨拶・参務秀圓案内）。
郷土芸能奉演（平泉町長部鹿
踊、胆沢町都鳥鹿踊、衣川村川西
大念仏剣舞）。
- 六 日 貫首、一関市にて講話（塑
性加工連合講演会 於一関工専）。
衣川村千葉卓治氏より白奉
納。
- 七 日 平泉町交通安全運動推進町
民大会（執事長 於役場）。
フアッシュンデザイナートリ平
ユキ氏来山（貫首挨拶・総務慎
有案内）。
- 八 日 西磐井郡老人クラブ連合会
一行一〇〇名来山（執事長挨拶）。
- 九 日 厳島神社飯田楯明氏来山（管

- 十 日 財澄元案内）。
一関商工会議所両磐インダス
トリアルプラザ一行一八名
来山（総務慎有案内）。
- 十一 日 白山比咩神社「加賀一ノ宮
敬神婦人会」様一行三〇名
来山（貫首挨拶）。
- 十二 日 群馬教区北前橋檀信徒会様
団参回向一〇八名（貫首挨拶）。
- 十三 日 厳島神社福田氏来山（管財澄元
案内）。
- 十四 日 開山一一五〇年祭閉幕法要
（如法写経十種供養会 教区内諸
師出仕のもと教法要として執行）
NHK学園写経講座（植村
和堂講師）六五名も参加
- 十五 日 陸奥教区二部檀信徒会（大
広間）。
- 十六 日 陸奥教区研修会（大広間）。
- 十七 日 一隅を照らす運動 天台宗
一斉托鉢（当山より八名出仕
於宮城県南万町）。

秘仏抜魂法要

十二日 菊まつり表彰式(大広間)

十三日 管財澄元、企画展「信の美」

經典借用寺院等へ御礼出張

(二十日)。

十五日 貫首、一関市にて講話(兩

磐地区納税貯蓄組合連合会 於一

関文化C)。

不動尊抜魂法要

金色院地鎮式

十六日 貫首、広間にて法話(兩磐

インダストリアルプラザ一行)。

不動尊入魂法要

十七日 一関経営者協会五十周年記

念式典(執事長 於ペリーノH)。

「平泉の文化遺産」が世界

文化遺産暫定リストに登載

される。

十八日 貫首、高橋克彦氏との対談

(「歴史・風土に根ざした郷土の川

づくりフォーラムin北上川」於一

関市体育館)。

二十日 平泉町民号(日光方面 貫首・

一老・澄円)。

山形県砂防協会一行来山

(執事長案内)。

一関菊花会菊花展表彰式

(春興 於一関中央公民館)。

寺報『関山』第七号発行

二十一日 町内千葉製材所より赤堂稲

荷鳥居奉納。

会津バス一行二一名来山

(総務慎有法話)。

管財澄元、盛岡へ出張(NH

K盛岡放送局他)。

二十二日 貫首、花巻市にて講話(岩

手県法人連合会、女性部会連絡協

議会特別研修会 随行慎有 於H

グランシエール花巻)。

二十三日 天台会御逮夜(結果勤 本堂)

管財澄元、埼玉へ出張(企画

展示品返却)。

境内自然観察会(貫首・秀圓)。

二十四日 天台会厳修(御影供 本堂)

日本経済新聞社専務牧久氏、製

作統括本部長徳永正裕氏来山

(執事長案内)。

二十五日 管財澄元、会津へ出張(企画

展示經典返却)。

二十六日 観光協会役員研修旅行

(二十八日萩・津和野・広島方

面 事業部澄照)。

二十八日 平泉町観光推進実行委員会

誘客キャンペーン(三十日

大阪方面 事業部澄照)。

二十九日 喜多流職分佐々木宗生師、盛

岡公演挨拶来山(貫首応接)。

◇十二月

一日 月次大般若会(本堂)

二日 管財澄元、東京へ出張(サン

トリー美術館、金色堂内ガラス片

受け取り)。

三日 平泉日武蔵坊開業二周年

「感謝の宴」(貫首・執事長他)。

四日 職員研修旅行一班(六日

広島方面 邦世同行)。

五日 管財澄元、東京へ出張（企画展經典返却）。

七日 薬師会（讃衡藏）

秘仏入魂法要

臨時一山会議

九日 喜多流能楽公演（仏文研邦世他四名 於県民会館）。

十日 貫首、栃木県岩船町へ出向。

十一日 職員研修旅行二班（十三日秀圓・澄元同行）。

事業部澄照、山形方面へ出張（十三日平泉町観光推進実行委員会誘客キャラバン）。

委員会議（執行役員・管財康純他 於西行苑）。

十二日 初詣警備会議（執行役員・管財康純他 於西行苑）。

十四日 弥陀会（本堂）

慈覚大師尊像抜魂法要

十五日 観光協会役員会（執行役員 於泉橋庵）。

十七日 白山会（本堂）

貫首、日光にて講話（日光市文化祭記念講演会 於日光市総

合会館）。

お経を読む会（瑠璃光院康純）

記者クラブ懇談会（執行役員他九名 於音羽）。

十九日 観光協会報編集会議（事業部澄照 於こまつ寿司）。

歌舞伎俳優中村吉右衛門師来山（執行役員）。

二十日 煤払い（マスコミ各社取材に来山）。

二十三日 中尊寺菊まつり反省会（春興 於泉そば屋）。

二十四日 文殊会（経藏）

慈覚大師尊像入魂法要（開山堂）

二十八日 恒例御供餅つき

二十九日 岩手放送境内より生中継

三十一日 午後三時 一山総礼

平成十三年

◇一月

一日 〇時 新年祈禱護摩供修行

（本堂）

六時 東山町「若水送り」

着

十時半 総礼

修正会 积迎供（本堂）

結果堂籠り（七日開山堂）

二日 九時半 正月祈禱護摩供（本堂）

十時 修正会薬師供（峯薬師・讃衡藏）

十四時 謡初め（広間）

三日 九時半 正月祈禱護摩供（本堂）

修正会 山王供（山王堂）

十一時半 元三会 慈恵供（本堂）

四日 修正会 薬師供（瑠璃光院薬師堂）

NHK盛岡放送局境内より中継。

五日 修正会 文殊供（経藏）

大般若会（利生院弁財天堂）

梵焼供（結衆勤、開山堂）

本日より寒修行（行者四名、

町内托鉢）

町新年交賀会（執事長）

六日 修正会 釈迦供・月山供

（釈迦堂）

七日 修正会 白山十一面供（本

堂）

大般若会（本堂）

十四時 修正会 弥陀供（金色

堂）

春の祭礼神事能番組決定

「竹生島」「秀衡」「仏師」

八日 修正会 薬師供（旧關伽堂薬

師・讃衡威）

一字金輪仏・千手観音法楽

修正会結願

十三時 恒例「金盃披き」

顧問弁護土山中邦紀氏葬儀

（管財澄元 於盛岡教育会館）。

九日 県観光連盟臨時理事会総会

（執事長 於盛岡日ニューカリー

ナ）。

十一日 節分講中会議（執事長他 於

泉橋庵）。

十三日 フタバ平泉社長一行来山

（貫首応接）。

小岩金網粥社長西村専次氏来

山（執事長応接）。

十四日 **慈覚会**（御影供 本堂）

お経を読む会（貫首）

十六日 文化財防火訓練事前打合せ

会（管財部康純 於泉そば屋）。

教区所長光中、東京教区宗

務所へ出張（十七日 宗務所

長会議）。

十八日 貫首、盛岡市にて講話（岩

手県産新春セミナー 於盛岡市南

部会館ザンパレス）。

十九日 文化財防火訓練実施打合せ

会（執事長・管財部康純 於毛越

寺レスト）。

森林組合緊急間伐協定説明

会（関係各院 広間）。

二十三日 菊まつり写真コンテスト審

査会（広間）。

入江正巳画伯より「法華説

法図」奉納。

二十四日 花巻温泉癸丑会（執事長 於

千秋閣）。

Hニュー江刺カッコーの会

新春講演会（総務慎有）。

観光協会役員会（執事長 於

岩間会館）。

平泉町世界文化遺産登録推

進協議会結成総会（執事長・

管財澄元 於役場）。

二十八日 **文化財防火デー**

三十日 貫首、宗務庁へ出向（二隅

を照らす運動理事会議）。

事業部澄照、札幌へ出張（

二月一日 岩手県修学旅行誘致説

明会 於Hニューオータ二札幌）。

入江正巳画伯一行来山（奉

納画に対しての記者会見、七社来

山）。

◇二月

一日 月次大般若（本堂）

NHK盛岡放送局「おぼん
ですいわて」にて寒行者紹
介（生中継）。

三日 恒例大節分会。関取栃乃花
招く。歳男歳女一一五名・
町内園児が豆を撒く。

寒修行満行。

五日 貫首、江刺市にて講話（江
刺市藤里公民館一日老人大学）。

六日 東京南ロータリークラブ清瀬幸
雄氏一行三名来山（貫首応接
仏文研那世案内）。

九日 金色院上棟式（祝賀会 於平
泉レスト）

十日 執事長、東京へ出向（前金
色堂保存施設調査委員長関野克氏
告別式）。

十一日 建国記念の日奉祝会（執事
長 於毛越寺レスト）。

十三日 観光協会役員会（執事長）。

十四日 涅槃会御逮夜（本堂）

十五日 涅槃会（本堂）

事業部澄照、福岡へ出張（
十七日 岩手県修学旅行誘致説明
会 於Hシーホーク）。

お経を読む会（真珠院後住澄
巴）

十六日 「平泉」世界遺産登録基礎
研究会（執事長・管財澄元 於
Hサンルート）。

平泉東友会通常総会（貫首
講話 於平泉レスト）。

泉ヶ城周辺災害復旧事業工
事説明会（管財部康純 於衣川
村東公民館）。

岩手県博大矢邦宣氏来山（貫
首応接）。

十八日 第一回世界文化遺産講演会
（貫首・執事長他 於毛越寺レス
ト）。

一部寺院会（十九日教区所長
光中 於秋保日華之湯）。

奈良市教育委員青山茂氏来山
（貫首応接）。

十九日 江刺ほむら会（貫首・執事長
於Hニュー江刺）。

「二〇〇〇年」平泉町写真
コンテスト作品審査会（事
業部澄照 於観光案内所）。

二十日 県観連主催旅行エージェン
トとの意見交換会（事業部澄
円 於志戸平温泉）。

サッポロビール東北支社長福永
勝氏来山（執事長・仏文研那世
応接）。

二十一日 中尊寺門前会研修旅行（
二十二日 貫首他松島方面）。

金色堂諸仏X線撮影調査
（二十三日 東北大学教授有賀祥
隆氏他）。

二十二日 貫首、一関市にて講話（岩
手日報リーダーズサークル一関例
会「野村万作・萬斎親子で楽しむ
チャリティー狂言の会」随伴澄円

於一関文化C)。

二十三日 布教師研修会(貫首他一山八

名 於毛越寺)。

観光協会定時総会(執事長

於平泉商工会館 新会長に小野寺

邦夫氏)。

二十四日 貫首、栃木県にて講話(と

ちぎ生涯学習文化財団「郷土史講

座」於栃木県立博物館)。

二十五日 山内観音院法事(本堂)。

二十六日 岩手日日文化賞贈呈式(総

務慎有 於Hサンルート)。

文化観光施設等整備運営委

員会(執事長 於役場)。

平泉町観光審議会委員長任命

並びに観光審議会(執事長

於役場)。

平泉町観光推進実行委員会

(執事長・事業部澄照 於役場)。

管財澄元、東北歴史博物館

へ出張(二十七日 列品指導

派遣依頼)。

二十七日 両磐地区観光向上研修会

(事業部澄照・澄円・職員五名

於花泉花と泉の公園)。

県観連常務理事中村武氏、事務

局長菅原誠郎氏、町助役橋本

良隆氏来山(総務応援)。

二十八日 西磐井地区民有林造林・育

林コンクール表彰式(管財

部康純 於一関地区合同庁舎)。

平泉町健康福祉交流館落成

式(総務慎有 於平泉温泉)。

◇三月

一日 月次大般若(本堂)

事業部澄照、東京へ出張(

二日 黄金王国キャラバン 於池

袋メトロポリタンH)。

中近東文化センター櫻井清彦

氏、衣川村長佐々木秀康氏、

平泉町議会議長高橋一男氏来

山(貫首応援)。

二日 労働基準協会労務管理研修

会(総務部広元 於ヘリーノH)。

四日 岩手県主催台湾有力旅行代

理店招待ツアー来山(事業

部澄円案内)。

六日 教区所長光中、弘前へ出張

(七日 三部寺院会・檀信徒会

於薬王院)。

八日 事業部澄照、盛岡へ出張(教

育旅行誘教宣伝部会 於農林会館)。

八日 菊まつり協賛会役員会(執

事長)。

観光協会役員会(執事長 於

泉橋庵)。

十三日 一関経営者協会臨時総会

(執事長 於Hサンルート)。

平泉町観光協会企画宣伝

部・事業部合同会議(事業

部澄照 於泉橋庵)。

栃木教区台林寺様二三名団

参(貫首挨拶)。

十四日 貫首、増田知事と対談。

十五日 西行祭短歌大会実行委員会

(総務 於ヘリーノH)。

十八日 自由党衆議院議員渡辺秀央氏

一行来山（管財澄元案内）。

十九日 基衡公御月忌（胎曼供 本堂）

お経を読む会（利生院後住宏

紹）

定例一山会議（大広間）

二十日 春彼岸会法要（法華三昧）

県主催平泉フォーラム（執

事長 於一関文化C）。

二十一日 平泉文化会議所総会（於郷

土館ホール）。

二十四日 開山会護摩供（開山堂）

陸奥仏教青年会総会（於毛

越寺）。

二十六日 県観連通常理事会・通常総

会（執事長 於日メトロポリタン

盛岡ニューウィング）。

二十七日 東下り保存会総会（事業部澄

照 於滝沢魚店）。

観光協会役員会（執事長）。

二十八日 平泉商工会地域懇談会（総

務慎重 於商工会館）。

◇四月

一日 月次大般若（本堂）

新執行局発足、一山辞令公

布

執事長邦世インタビュー

（岩手日報社）

大長寿院後住光聴君本日よ

り事務局勤務。

二日 執事長インタビュー（岩手

日日社）

新旧執事長・総務執事、町

内・一関挨拶回り。

三日 貫首、御修法出仕のため本

山へ出向（十一日）。

新旧執事長・総務執事、盛

岡挨拶回り。

山内真珠院前住内室菅野フ

子様逝去。

五日 ㈱ミヤノ新入社員研修一〇

名来山（管財澄照）。

六日 一関信用金庫理事長八重樫氏来

山。

岩手日報一関支社長小野寺雄剛

氏来山（執事長挨拶）。

七日 花まつり打合せ（法務広元・

長生 於こまつ寿司）

八日 仏生会（本堂）

教区法要（教区所長光中他 於

弘前市報恩寺）

九日 真珠院前住内室菅野フ子様

葬儀（本堂）

十二日 弁慶力餅競技保存会総会

（管財部秀厚 於泉そば屋）。

十三日 町文化遺産登録推進協議会

役員会（管財澄照 於役場）。

奈良博伊東哲夫氏来山（特別

展へ出陳予定の資料調査のため）。

十四日 菊まつり協賛会総会（大広

間）。

観光協会副会長千葉庄悦氏、

事務局長千葉茂男氏来山。

盛岡警察学校新入生四四名

来山（貫首法話 本堂）。

十五日 大長寿院後住光聰君婚儀
(本堂)。

十六日 宮尾登美子氏一行七名来山
(貫首・参務光中・管財澄照 於茶室)。

FM岩手取締役副社長清水秀夫氏来山(総務仁秀・参拝慎有)。

十七日 陸奥教区会、一隅理事会。
春の藤原まつり警備会議
(執事長・総務・管財 於西行苑)。

十八日 能申合せ(大広間)。

十九日 町観光協会役員会(執事長 於観光案内所)。

二十日 紺紙着色金光明最勝王経金字宝塔曼荼羅、国宝に指定との答申がなされた旨報道。

二十一日 貫首、本堂にて法話(東京南ロータリークラブ)。

貫首、大広間にて法話(陸奥教区寺院婦人研修会)。

二十二日 恒例花まつり
平泉町消防交友会総会(管

財澄照 於毛越寺レスト)。
二十三日 法人税・消費税申告説明会
(参拝慎有 於一関市アイドーム)。

「二十一世紀友情の翼」代表岩根哲哉氏来山(執事長・総務部快俊)。

須賀川南部地区町内会協議会一行五名来山(執事長挨拶・参務光中案内)。

二区老人会清掃奉仕・花見会(執事長・管財澄照・秀厚)。

一関地区防災協会総会(管財澄照 於消防本部)。

平泉商工会青年部通常総会(総務部澄円 於商工会館)。

二十四日 貫首、テレビ岩手川勝平太氏との対談(茶室)。

金色院施主検査(執事長・金色院・総務・管財・仏文研澄元)。

二十五日 中尊寺ハス株分け(二十一日執事長・仏文研澄元 白水阿弥陀堂及び龍興寺)。

二十七日 岩手日報取材(中尊寺ハス株分けの件、執事長)。

二十八日 能申合せ(能楽堂)
二十九日 第二十二回 西行祭短歌大会
(講師田谷鋭氏)

◇五月
一日 春の藤原まつり開幕
藤原四代公追善法要、稚児行列、常の如し。

郷土芸能奉演(胆沢町柳田念仏剣舞)。

二日 開山護摩供(開山堂)
いわき市内郷青年会議所一行六名来山(貫首・執事長応援)。

東下り行列主要役者レセプシヨ(執事長 於日武藏坊)。

郷土芸能奉演(達谷毘沙門神楽)。

三日 源義経公東下り行列(義経公役・タレントの山崎裕太)

郷土芸能奉演(衣川村川西大念仏剣舞)。

NHKラジオ俳句インク

(茶室・境内より生放送。)

四 日 古式式三番

神事能「竹生島」

郷土芸能奉演(平泉町行山流

長部鹿踊、胆沢町朴の木沢念仏剣

舞、胆沢町行山流都鳥鹿踊。)

五 日 古式式三番

狂言「仏師」

神事能「秀衡」

郷土芸能奉演(江刺市行山流

角懸鹿踊、達谷毘沙門子供神楽。)

弁慶力餅大会反省会(参務

秀圓 於滝沢魚店。)

六 日 山王講(山王堂)

七日 一関地区旅館組合新人研修

会来山(執事長挨拶)

金色院引渡し(松井建設・執

事長・金色院・総務。)

一山金色院見学会

八 日 龍興寺様二名来山(貫首応接。)

九 日 警察官友の会理事会(執事

十日 金色院落慶式(祝賀会 於平

泉レスト)

長 於一関警察署。)



寺庭婦人会岩手支部総会

(教区所長光中 於毛越寺)

西磐井郡市仏教会総会(法

務部長生 於一関。)

十一日 県信用保証協会長神田隆氏来

山。

十二日 岩手県障害者福祉大会一行

三〇名来山(執事長挨拶。)

十三日 山内真珠院法事(自坊)

十四日 青葉能実行委員会(執事長

於河北新報社。)

十五日 わらび座座長一行来山(貫

首挨拶・執事長。)

十六日 岩手県観光協会全員協議会

(執事長 盛岡グランドH。)

十七日 貫首、栃木県にて講話(栃

木県教育委員会。)

十九日 山内観音院前任内室清水哲

様逝去。)

二十日 中尊寺杯ゲートボール大会

(執事長 於勤労者体育センター。)

山内利生院法事(本堂)

お経を読む会（地藏院後住秀厚）

二十二日 貫首、盛岡にて講話（北日

本銀行経友会 随行澄円 於盛岡北銀本店。

二十三日 貫首、本堂にて法話（NH

K郡山文化C一行四〇名）。

観音院前住内室清水哲様葬儀（本堂）。

二十五日 平泉をきれいにする会（管

財部秀厚 於役場）。

平泉商工会総会（総務仁秀 於商工会館）。

貫首、紫波町にて講話（紫波町観光協会 随行快俊）。

警察官友の会総会（執事長 於Hサンルート）。

二十七日 コスモス短歌会一行六〇名

来山（参拝慎有案内）。

二十八日 花泉町先人顕彰会（執事長講

話 於花泉町役場）。

三十日 座禪・写経研修（講師小森文

道師）。

江刺市新庁舎落成式典（貫

首 於日ニュー江刺）。

三十一日 藤原まつり反省会（執事長

於泉橋庵）。

◇六月

一日 群馬教区真光寺様紹介謡曲愛好

会一行二二名来山（貫首挨拶）。

「平泉をきれいにする会」

東稲山清掃（執事長・管財澄

照・秀厚）。

青森県知事夫人来山（貫首 挨拶・参務光中案内）。

二日 信越教区観音寺様一行八〇

名来山（執事長法話 本堂）。

三日 ふるさと平泉会（執事長 於

東京池之端文化C）。

四日 伝教会（御影供 本堂）

六日 貫首、一関市にて講話（真

滝血庄友の会 随行光聰 於一関市農村C）。

九日 第五分団研修旅行（十一日、

九州 管財澄照）。

総代会役員会（法務広元・長

生 於地藏屋）。

十日 法華経一日頓写経会（二〇

〇名参加）

仙台青葉能（執事長 於仙台市

市民会館）。

十三日 油島公民館高齢者学級来山

（執事長法話 本堂）。

十四日 天台宗新成会懇親会（貫首・

教区所長光中 於群馬県水上温泉）。

十六日 山家学会総会並びに学術大

会（執事長 於大正大学）。

十七日 第四十九回ウエーサカ讚仏

会（秀厚 於花泉医王寺）。

十八日 平泉菊花会総会（春興・澄照

於泉そば屋）。

十九日 山内瑠璃光院法事（本堂）

平泉観光キャラバン実行委員会設立委員会（執事長 於

浄法寺町長清川明彬氏他来山 役場）。

(貫首応接・執事長案内)。

中国天台県小学校校長・教育長一行来山(貫首応接・執事長案内)。

二十日 自在坊蓮光忌法要(本堂)

中尊寺総代会(執事長他 於平泉レスト)。

二十二日 県生涯学習課長・世界遺産

登録担当者他来山(貫首・執事長)。

世界遺産登録推進協議会

(執事長 於役場)。

二十二日 紺紙着色金光明最勝王經金

字宝塔曼荼羅十幀が国宝に指定(官報告示)。

弁慶力餅競技保存会研修会

(総務部快俊 於平泉レスト)。

二十三日 北上川景観現地説明会(貫

首他 於柳之御所資料館)。

貫首、本堂にて法話(近畿

日本ツーリスト一行)。

二十四日 裏千家銀河青年部一行二一

名来山(執事長法話 本堂)。

西行祭短歌大会反省会(執事長他 於一関文化C)。

二十五日 奈良博特別展「仏舍利と宝

珠」に出陳のため金銀装舍利壇搬出(奈良博西山厚氏来山

管財澄照立念)。

平泉町社会を明るくする会

総会(執事長 於役場)。

二十六日 高館環境検討委員会(執事

長 於役場)。

貫首、郷土館にて講話(西

磐井婦人大念)。

平泉町観光キャラバン実行

委員会(総務仁秀・澄円 於役

場)。

二十七日 紺紙金銀字經三卷、寺に還

藏なる。

二十九日 芭蕉祭俳句大会(執事長 於

毛越寺)。

三十日 岩手県博物館等連絡協議会

南ブロック会(管財澄照 於

一関市博物館)。

金子兜太氏講演会(貫首・執事長 於平野ホール)。

◇七月

一日 月次大般若(本堂)

山内観音院法事(本堂)

三日 管財澄照、京都へ出張(紺紙

金銀字経拜見の為)。

四日 水沢市高橋豊巳氏より櫛古

木衝立奉納。

岩手県観光協会マスコミ招

待会一行来山。

水かけ神輿警備会議(執事

長・管財部秀厚 於商工会館)。

五日 立正佼正会春日部教会一行

来山(貫首法話 本堂)。

六日 平泉町・紫波町議員懇談会

(貫首・執事長 於日武蔵坊)。

七日 東下り保存会研修旅行(

八日 執事長 大洗方面)。

松喰い虫被害(峰薬師堂前松

一本伐採 管財部秀厚)。

紺紙金銀字經一卷、寺に還藏なる。

八日 如法写経十種供養会、頓写法華經奉納式。

九日 松島瑞巖寺管長メキシコ客人と共に来山（貫首応接・参務光中案内）。

讚衡蔵「第二十一回東北建築賞審査員特別賞」受賞祝賀会（貫首他 於一関ひさし屋）。

十日 貫首、江刺市にて講話（胆江地区保護司会 於江刺市役所）。

十一日 貯水池清掃作業（管財部）。

十二日 岩手県博物館等連絡協議会総会（管財澄照 於北上ブラザH）。

江刺「ほむら会」研修旅行（貫首・慎宥 於日光）。

十七日 清衡公御月忌（胎曼供 本堂）

奉納者感謝状授与鈴木正人夫妻（灯籠一對・華籠二枚）・水沢高橋豊巳夫妻（樺衝立）・岩間沈夫妻（紺紙金銀字

一卷他二十二忌）。

十八日 ロンドンでの海外展に出陳のため「老女面」搬出（東博浅見龍介氏来山 管財澄照立会）。

十九日 山内瑠璃光院法事（本堂）
教育旅行誘致宣伝部会総会（総務部快俊・管財澄照 於Hメトロポリタン盛岡）。

岩手県博大矢邦宣氏「奥州藤原氏五代」出版記念パーティー（貫首他 於盛岡グランD.H）。

二十一日 いわき市青年会議所一行一

五名来山（貫首法話 本堂）。
水かけ神輿宵宮（執事長・参務秀圓）

江東区長・富岡八幡宮神輿連合会との交流会（執事長 於H武蔵坊）。

二十二日 平泉総社神輿渡御

東京都江東区長挨拶来山（貫首応接）。

二十三日 平泉町観光キャラバン（二十六日 札幌方面澄円）。

二十五日 惠泉女学園園芸短大教授長島時子氏来山（中尊寺ハス開花状況確認）。

二十七日 岩銀リース社長高橋氏来山（貫首応接）。

入蔵となった金銀字・金銀字經奉安法要及び披見（昭和五十六年〜平成十三年 金銀字經九卷・金銀字經三卷）。

大文字まつり及び薪能警備会議（管財部秀厚 於西行苑）。

二十八日 前新宝物館建設委員宮野秋彦氏来山（貫首・執事長応接）。

二十九日 薬樹王院前住一周忌法要（本堂）

三十一日 岩手県観光協会専門委員会合同会議（執事長 於Hロイヤル盛岡）。

◇八月

一日 月次大般若（本堂）

栗駒町観光商工課 高橋氏来山
(総務仁秀)。

鶴見大学文化財学科一行七

〇名来山 (執事長法話・管財澄
照案内)。

四 日 十五時半、〈平和の鐘〉打鐘。

六 日 教育旅行誘致宣伝部会幹事
会 (管財澄照 於盛岡地区合同庁
舎)。

七 日 夏安居 (結衆勤、開山堂)

NHK「おい日本」境内
撮影。

八 日 平泉町観光キャラバン実行
委員会 (総務仁秀・澄円 於役
場)。

大文字まつり担当者会議
(法務部長生 於こまつ寿司)。

九 日 NHK盛岡中丸氏来山 (執事
長・管財澄照)。

毎日新聞インタビュー (執
事長)。

十 日 梵焼供 (結衆勤、常の如し)

十四日 第二十五回中尊寺新能

半能「高砂」(塩津哲生師)

能「八島」(佐々木宗生師)

「猩々乱」(佐々木多門師)

狂言「縄綱」(野村万作師)

十六日 第三十七回平泉大文字まつり

二十日 観福寺施餓鬼会 (澄順他参席)

毛越寺施餓鬼会 (執事長他参
席)

貫首、本山へ出向 (戸津説法
陪席 随行光聴 於東南寺)。

二十一日 教育旅行現地研修会 (執事
長 於花巻千秋閣)。

二十二日 花壇コンクール審査 (管財
部秀厚)。

教育旅行現地研修会札幌市
内中学校教諭一行一八名来
山 (執事長案内)。

二十三日 大施餓鬼会御逮夜 (本堂)

二十四日 大施餓鬼会・放生会 (本堂)

二十六日 達谷西光寺金堂落慶式 (貫
首他 随行光聴)

◇九月

一日 月次大般若 (本堂)

山形県瀬見温泉亀割観音例

祭 (円教院快恩参席・随行宏紹)

ガイドブック「中尊寺を歩
く」発行



三日 泰衡公御月忌 (金曼供 本堂)

金色堂諸仏抜魂

金色堂諸仏X線撮影調査

(東北大学教授 有賀祥隆氏他)

四 日 貫首、大広間にて法話 (県
南地区商工会女性部)。

五日 管財澄照、奈良国立博物館
へ出張 (金銀装舍利壇検分のた

- め)。
- 六 日 一関地方振興局土木部来山
(執事長)。
総務部澄円、大坂へ出張()
八日 県観光客誘致説明会 於H
グランヴィア大坂)。
フジテレビ系列社長一行来
山(参拝慎有案内)。
ウオーキングトレイル説明
会(広間)。
- 八 日 山目中学校三年生勤行随喜。
金色堂諸仏入魂
五郎沼薬師神社祭礼(地藏
院秀圓参席)。
- 九 日 一隅理事会(広間)
- 十 日 札幌市内旅行者現地研修
会一行来山(執事長案内)。
- 十一日 平泉観光キャラバン実行委
同懇談会(執事長 於花巻温泉)。

- 員会(総務仁秀・澄円 於役場)。
- 十二日 県観光協会評議委員会(執
事長 於Hニューカリーナ)。
国際交流いっくら懇親会
(貫首 於いっくし園)。
- 十三日 同一行来山(執事長案内)。
奈良博特別展へ出陳されて
いた「金銀装舎利壇」返却
(奈良博宮田康和・伊東哲夫氏来
山 管財澄照立念)。
- 十四日 パラグアイ大使・エクアド
ル大使夫妻他来山(執事長案
内)。
- 十五日 平泉町敬老会(執事長)。
- 十六日 常住院法嗣亮王君得度式
- 十七日 東北歴博特別展「はるかみ
ちのく」に出陳のため「義
経画像」はじめ七点を搬出
(東北歴博 政次浩・佐藤琴氏来
山 管財澄照立念)。
- 十九日 参拝慎有、札幌へ出張()二
十一日 県観光客誘致説明会 於



貫首、盛岡市にて講話（県労働基準協会五十周年記念式典於盛岡GH）。

二十三日 秋彼岸会法要（常行三昧）

お経を読む会（葉樹王院澄照）

二十八日 平泉町社会福祉大会（執事長 於毛越寺レスト）。

二十九日 貫首、福島にて講話（福島教区一隅を照らす運動 於しらすわカルチャーセンター 随行快俊）。

◇十月

一日 月次大般若（本堂）

貫首、本山へ出向（別請豎義 随喜 随行澄円）

JTB教育旅行研修会意見交換会（執事長 於安比グラウンドホテル）。

二日 文化財建造物修理技術者養成研修一行十二名来山（管財澄照案内）。

日本経済新聞盛岡支局関係来山（執事長応接）。

四日 台湾報道関係十五名来山（執事長案内）。

五日 平泉町観光協会役員会（執事長 於観光案内所）。

菊まつり役員会（広間）。

茶道表千家峯潤会七十名来山（管財澄照案内）。

七日 日本考古学協会盛岡大会（貫首・成寛 於盛岡市民文化ホール）。

八日 千葉県夷隅郡医師会来山（執事長案内）。

岩手県人会副会長刈屋恵三氏来山（執事長案内）。

十日 葛飾区博谷口榮氏他二名、出陳予定の資料を撮影のため来山。

十一日 平泉観光キャラバン実行委員会（執事長 於役場）。

貫首、入間田氏との対談（「白い国の詩」 於秋保温泉）。

十三日 日本自動車部品工業会役員

来山（執事長案内）。

十四日 黄金荘収穫祭（参務光中）お経を読む会（円教院後住快俊）。

十五日 平泉小学校体育館ステージ綴帳デザイン選定委員会

（執事長 於役場）。

十六日 荒了寛師「みちのく仏の旅」一行二二名来山。

東日本奉詠舞大会優勝報告会（貫首・執事長 於平泉レスト）。

葛飾区郷土と天文の博物館特別展「源頼朝と葛西氏」

に出陳のため中尊寺文書等合計七点を搬出（葛飾区博谷口榮氏来山 管財澄照立会）。

十七日 能申合せ（大広間）。

十八日 貫首、花巻市にて講話（岩銀リースデータ㈱ 於花巻温泉）。

十九日 平泉町戦没者追悼式（本堂）岩銀リースデータ㈱社長会

来山（総務仁秀案内）。

ビザ・ジャパン協会理事五

二名来山（執事長法話 本堂）。

二十日 菊まつり開幕法要

二十一日 天台宗全国一斉托鉢（二

十二日 弘前）。

青森県史古代部会熊谷公男

氏・古川淳一氏来山（管財

澄照・仏文研成寛）。

二十四日 貫首、本堂にて法話（神奈

川県命徳寺関係町内念）。

郡市仏教会五十周年記念式

典第一回検討委員会（法務

部長生 於あついでい屋）。

二十五日 東北建設協会一行四五名来

山（執事長案内）。

ギリシャ大使来山（貫首挨拶・参務光中案内）。

執事長、講話（政府関係法人

労働組合連合会 於ホテル花巻）。

天台宗陸奥教区第二部壇信

徒会総会（法務広元 於毛越寺）。

二十六日 松井建設社長松井角平氏来山

（貫首応接）。

二十七日 第十四回「奥の細道」一関

サミット（執事長 於一関文化

C）。

二十八日 秀衡公御月忌（金曼供 本堂）

「奥の細道」一関サミット

一行五〇名来山（執事長案内）。

平泉ライオンズクラブ三十

五周年記念式典（執事長 於

H武蔵坊）。

三十日 能申合せ（能楽堂）

三十一日 エジプト大使夫妻来山（参

務光中案内）。

同懇親会（貫首他 於ペリーノ

H）。

◇十一月

一日 秋の藤原まつり開幕

藤原四代公追善法要、稚児

行列、常の如し）。

郷土芸能奉演（胆沢町柳田念

佛剣舞）。

新聞社編集長会議関係者来

山（東奥日報社 塩越隆雄編集局

長、秋田魁新報社 前川重明編集

局長、山形新聞社 塩野寿伸編集

局長、福島民報社 橋政道編集局

長、共同通信社 新居誠編集局長、

長谷川博信台支社長、若松清人

盛岡支局長、岩手日報社 宮澤徳

雄編集局長、山添勝寛編集局次長、

杉田盛彦報道部長、佐藤剛整理部

長 執事長案内）。

東京浄土宗西念寺様一行二

四名来山（執事長案内）。

韓国マスコミ取材一行一五

名来山（執事長案内）。

平泉観光キャラバン実行委

員会（総務部快俊・澄円 於役場）。

二 日 菊供養会

郷土芸能奉演（平泉町達谷毘

沙門神楽、平泉町行山流長部鹿踊）。

日本テレビ報道局長一行一

五名来山（執事長応接）。

三日 中尊寺能「土蜘蛛」(能楽堂)



五日 仙台交通指導隊本町支部来山(管財部秀厚案内)。

郷土芸能奉演(胆沢町行山流 都鳥鹿踊、衣川村川西子供剣舞)。
茨城トマト生産組合八〇名来山(参務光中法話 本堂)。

一関・平泉行政区長研修会

(執事長 於ダイヤモンドパレス)。

七日 平泉町民号(九日、安紹・秀厚)

八日 岩銀デューシーカード社長

他八名来山(金色院澄順案内)。

長野県議会議会委員九名来山

(執事長案内)。

九日 北海道文化財保護協会二七

名来山(執事長案内)。

十日 如法写経十種供養会(本堂)

十二日 日光観音寺檀信徒一四名来

山(貫首応接・案内)。

十四日 東北歴博特別展へ出陳され

ていた「義経画像」はじめ

七点返却(岩手県博大矢邦宣

氏・東北歴博佐藤琴氏来山 管財

澄照立会)。

十六日 平泉商工会四十周年記念式

典(執事長 於毛越寺レスト)。

貫首、一関市にて講話(岩

手日報社主催 未来を語る「平泉

から世界へ」鼎談、執事長司会

於一関文化C)。

横浜市歴博遠藤廣昭氏・吉川

久雄氏、出陳予定の資料を

撮影のため来山。

十八日 岩手県立博物館友の会一行

五五名来山(公文研澄元案内)。

平泉周辺景観シンポジウム

(執事長 於役場)。

二十日 参拝慎有、名古屋市へ出張

(二十二日、観光客誘致説明会・

修学旅行誘致説明会 於名古屋中

日パレス)。

二十一日 貫首、栃木県にて講話(於

栃木県壬生町中央公民館)。

二十二日 高館環境委員会(執事長 於

役場)。

平泉小学校体育館ステージ

綴帳デザイン選定委員会

(執事長 於役場)。

二十三日 天台会御速夜(結衆勤 本堂)

臨時一山会議(大広間)

二十四日 天台会殿修(御影供 本堂)

御奉納者 御芳名

平成十二年十一月～平成十三年十二月八日

- 一、御供餅つき用臼一基 衣川村 千葉卓治 様
- 一、「中尊寺法華説相図」(寺報ぐらびあ参照) 横浜市 入江正巳 様
- 一、櫻材衝立一基 水沢市 高橋豊巳 様
- 一、紺紙金字大般若経・紙本墨書大般若経等式拾式点 平泉町 岩間 洗 様
- 一、燈籠一对・華籠二枚 平泉町 鈴木正人 様
- 一、入江正巳筆 「中尊寺法華説相図」(複製軸装一幅) 東京都 フランクリン・ミント社 様
- 一、法要用傘二十本 為 寿光院華詠藤陽大姉位追善供養 山内真珠院 様
- 一、護摩木用杉材(百座分) 山内真珠院 様
- 一、御供用餅米 五斗 衣川村 千葉卓治 様

不動尊篤信御奉納者 御芳名

平成十二年十月～平成十三年十月

- 北海道 富良野市 榊南運輸 南和夫様 参萬五千元
- 青森県 南津軽郡 (喜世念)小笠原喜世様 七拾式萬六千元
- 青森県 黒石市 北山 肇様 八萬元
- 青森県 上北郡 盛田悠三様 七萬五千元
- 青森県 三戸郡 工藤銀四郎様 季毎御供物
- 青森県 中津軽郡 笹 隆治様 季毎御供物
- 二戸市 米沢 励様 季毎御供物
- 滝沢村 斉藤 實様 参萬四千元
- 宮古市 槻川原光晶様 参萬円
- 北上市 高橋喜徳郎様 参萬円
- 室根村 シュアーエンジニアリング様 参萬円
- 川崎村 最明寺 黒澤恵辰様 参萬参千元
- 平泉町 (尙)千葉製材所様 参萬円
- (代)平泉中学校卒業生 佐々木元様 壹拾式萬六千元

一関市
平泉中学校第十回卒業生様 老拾萬円
㈱阿部礦産様 参萬円

山平様 参萬円

川嶋印刷㈱様 老拾萬円

㈱精茶百年本舗 清水恒輝様 参萬円

(有)ケーテック 芦萱敬一様 参萬九千円

(有)豊隆軌道 千葉幸八様 七萬円

小山利男様 四萬五千円

山口滋夫様 四萬五千円

(有)金成工務店様 参萬円

桜井高志様 参萬円

阿部恵美様 参萬円

沼田とも子様 季毎御供物

根田正明様 九萬円 献酒

川熊武芳様 老拾五萬八千円 献酒

伊藤清子様 老拾参萬貳千円 献酒

熊谷伎余子様 四萬五千円

埼玉県
さいたま市

埼玉県
浦和交通安全協会様 参萬円
東京都
目黒区 中越テック株式会社様 四拾萬円

中越テック株式会社
社長 岩川 熙様 八萬円

東京都
新宿区 中村武司様 参萬円

東京都
大田区 鈴木幸三様 参萬円

東京都
中央区 キヤントラス・インターナショナル
八重樫昭様 参萬円

大阪府
和泉市 辻林正博様 六萬円 献酒

赤堂稻荷鳥居建立寄進 御芳名

平成十二年十一月〜平成十四年一月

平泉町 千葉製材所様

鈴木正人様

菅原杏子様

後記

▽今回から寺報『関山』の編集を担当することとなった。とは言っても全くの初体験で、遂に、発行が当初の予定より大幅に遅れてしまった。執筆ご協力いただいた方々に申し訳なく思っている。

▽鼎談を掲載させていただいた中津文彦氏、黒沼芳朗氏、藤里明久氏、ご寄稿いただいた志賀かう子氏、及川司氏をはじめ本誌の発行にかかわった全ての方々に感謝申し上げます、心して次号に当たりたい。

〔北嶺澄照〕

中尊寺〈寺報〉『関山』第八号

平成十四年(二〇〇二)二月二十日

発行 中尊寺

(執事長 佐々木邦世)

〒〇二五-四一九五

岩手県平泉町字衣関二〇二

編集 中尊寺仏教文化研究所

印刷 川嶋印刷(株)